

比 恵 91

—比恵遺跡群第155次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1489集

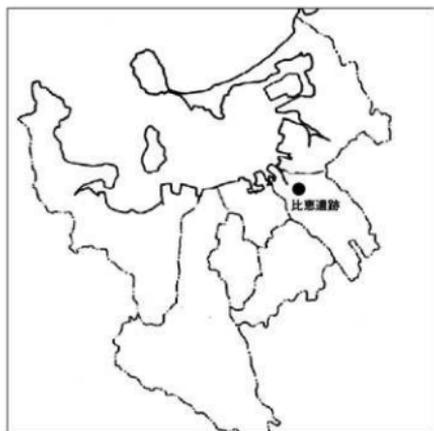
2023

福岡市教育委員会

比 恵 91

—比恵遺跡群第 155 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1489 集



遺跡略号 HIE - 155

調査番号 1953

2023

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄海灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方ながら交流が絶え間なくおこなわれてきました。福岡市には、このような交流を裏付ける旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの遺跡を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は共同住宅建設に伴って実施した比恵遺跡群第155次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代後期～古代の遺構を検出するとともに、同時代の遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社グッドライフカンパニー様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設事業に伴い、福岡市博多区博多駅南6丁目12-3.13-3.14-3.14-4.14-7において発掘調査を実施した比恵遺跡群第155次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、清金良太・中園将祥が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・井上加代子・山本麻里子が行った。
5. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、清金が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は、清金、井上が行った。
7. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅱ座標系）によるものである。
8. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、堅穴建物をSC、溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
9. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆および編集は、清金が行った。

| | | | | | |
|-------|---------------------------------------|---------|---------|--------|--------------------------|
| 遺跡名 | 比恵遺跡群 | 調査回数 | 第155次 | 遺跡略号 | HIE-155 |
| 調査番号 | 1953 | 分布地図図幅名 | 東光寺37 | 遺跡登録番号 | 0127 |
| 申請地面積 | 1,484.92㎡ | 調査対象面積 | 562.92㎡ | 調査面積 | 433.56㎡ |
| 調査地 | 福岡市博多区博多駅南6丁目12-3.13-3.14-3.14-4.14-7 | | | 事前審査番号 | 2019-2-363 2019-2-364 |
| 調査期間 | 令和元（2019）年12月9日～令和2年3月24日 | | | | |

本文目次

| | |
|---------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 調査の組織 | 1 |
| II. 遺跡の立地と環境 | 2 |
| III. 調査の記録 | 7 |
| 1. 概要 | 7 |
| 2. 遺構と遺物 | 7 |
| I 区 | |
| 1) 掘立柱建物 (SB) | 7 |
| 2) 竪穴建物 (SC) | 10 |
| 3) 溝 (SD) | 13 |
| 4) 井戸 (SE) | 14 |
| 5) 土坑 (SK) | 20 |
| II 区 | |
| 6) 掘立柱建物 (SB) | 21 |
| 7) 竪穴建物 (SC) | 21 |
| 8) 溝 (SD) | 23 |
| 9) 井戸 (SE) | 25 |
| 10) 土坑 (SK) | 35 |
| 3. 結語 | 37 |

挿図目次

| | |
|--|----|
| 第 1 図 比恵遺跡群位置図 (1/25,000) | 3 |
| 第 2 図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/2,000) | 4 |
| 第 3 図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/1,000) | 5 |
| 第 4 図 調査区周辺旧地形図 (1/4,000) | 6 |
| 第 5 図 I 区全体図 (1/100) | 8 |
| 第 6 図 SB035 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) | 9 |
| 第 7 図 SB015-046 実測図 (1/60) および SB015 出土遺物実測図 (1/4) | 10 |
| 第 8 図 SC004-006 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) | 11 |
| 第 9 図 SC105-106 実測図 (1/60) および SC105 出土遺物実測図 (1/4、1/8) | 12 |
| 第 10 図 SD002 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) | 13 |
| 第 11 図 SD051 実測図 (1/80) | 14 |
| 第 12 図 SD051 出土遺物実測図 1 (1/4) | 15 |
| 第 13 図 SD051 出土遺物実測図 2 (1/4) | 16 |
| 第 14 図 SE005-007 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4、1/8) | 17 |
| 第 15 図 SE008 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) | 18 |
| 第 16 図 SE084 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 1 (1/4) | 19 |
| 第 17 図 SE084 出土遺物実測図 2 (1/4) | 20 |
| 第 18 図 SK080 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4) | 21 |

| | | |
|------|--|----|
| 第19図 | Ⅱ区全体図 (1/100)..... | 22 |
| 第20図 | SB233・255 実測図 (1/60)..... | 23 |
| 第21図 | SC245・261 実測図 (1/60) および SC245 出土遺物実測図 (1/4) | 24 |
| 第22図 | SD228 実測図 (1/100) | 25 |
| 第23図 | SD228 出土遺物実測図1 (1/4)..... | 26 |
| 第24図 | SD228 出土遺物実測図2 (1/4)..... | 27 |
| 第25図 | SE201 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4、1/8)..... | 28 |
| 第26図 | SE244 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) | 29 |
| 第27図 | SE246 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) | 30 |
| 第28図 | SE264 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) | 31 |
| 第29図 | SE265 実測図 (1/40) および出土遺物実測図1 (1/4) | 32 |
| 第30図 | SE265 出土遺物実測図2 (1/4、1/8、1/10)..... | 33 |
| 第31図 | SE266・267 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4、1/6) | 34 |
| 第32図 | SE268 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4) | 35 |
| 第33図 | SE269・292 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4、1/6) | 36 |
| 第34図 | SK225 実測図 (1/6) および出土遺物実測図 (1/4) | 37 |
| 第35図 | 比恵遺跡群出土浮文を有する土器 (1/4) | 38 |

表目次

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| 第1表 | 比恵・那珂遺跡群出土浮文を有する土器一覧 | 38 |
|-----|----------------------------|----|

図版目次

| | | |
|------|-------------------------|-------------------------|
| 図版1 | (1) I区全景 (上空から) | (2) Ⅱ区全景 (上空から) |
| 図版2 | (1) SP035 土層 (東から) | (2) SP042 土層 (東から) |
| | (3) SP069 土層 (東から) | (4) SC004 (北から) |
| | (5) SC004 土層 (西から) | (6) SC004 土層 (南から) |
| 図版3 | (1) SC105・106 (上空から) | (2) SC105 土層 (北東から) |
| | (3) SC105 土層 (北西から) | (4) SD051a-a' 土層 (北東から) |
| | (5) SD051b-b' 土層 (北東から) | (6) SE007 (南東から) |
| 図版4 | (1) SE008 (南東から) | (2) SE084 (北東から) |
| | (3) SE084 (北東から) | (4) SK080 土層 (南から) |
| | (5) SK080 (南から) | (6) SC245 土層 (北西から) |
| 図版5 | (1) SD228a-a' 土層 (西から) | (2) SE201 (南西から) |
| | (3) SE244 (南西から) | (4) SE246 (西から) |
| | (5) SE264 (南東から) | (6) SE265 (南から) |
| 図版6 | (1) SE267 (南から) | (2) SE268 (西から) |
| | (3) SE269 (南東から) | (4) SE269 (南東から) |
| | (5) SE292 (北西から) | (6) SE225 土層 (東から) |
| 図版7 | I区出土遺物 | |
| 図版8 | I区出土遺物 | |
| 図版9 | Ⅱ区出土遺物 | |
| 図版10 | Ⅱ区出土遺物 | |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

令和元(2019)年7月3日、株式会社グッドライフカンパニーより、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係に博多区博多駅南6丁目12-3,13-3,14-3,14-4,14-7における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された(2119-2-363・364)。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に位置しており、申請地の周辺では比恵遺跡群第57、82次調査が行われている。同課はこれを受けて令和元年8月27日に確認調査を行った。確認調査の結果、地表面下30cmに遺物包含層、55cmに鳥柄ローム層が確認され、遺構面が残っていることを確認した。事業主と同課は文化財保護に関する協議を持ったが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅が建設される561.92㎡を対象に発掘調査を行うことで合意した。その後、令和元年11月22日付で株式会社グッドライフカンパニーを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和元年12月9日～令和2年3月24日まで発掘調査を、令和2年度～令和4年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社グッドライフカンパニー

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和元年度、資料整理・報告書作成：令和2～4年度）

| | |
|-------|-----------------------------|
| 調査総括： | 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人 |
| | 同課調査第1係長 吉武学 (元年度) |
| | 同課調査第1係長 本田浩二郎 (4年度) |
| 庶務： | 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝 (元年度) |
| | 内藤愛 (4年度) |
| 事前審査： | 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎 (元年度) |
| | 田上勇一郎 (4年度) |
| | 同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎 (元年度) |
| | 森本幹彦 (4年度) |
| | 同課事前審査係文化財主事 朝岡俊也 (元年度) |
| | 三浦悠葵 (4年度) |
| 調査担当： | 埋蔵文化財課文化財主事 清金良太 (元年度) |
| | 埋蔵文化財センター保存分析係 清金良太 (4年度) |

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について株式会社グッドライフカンパニー様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置しており、隣接する那珂遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。那珂遺跡群とは浅い谷によって区分されている。比恵遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい谷が複雑に入り込む丘陵であり、今回の調査地点は丘陵の西斜面に位置している。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、那珂遺跡群、井尻遺跡群、さらに南には須玖岡本遺跡群を中心とした遺跡群が広がる。比恵遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火砕流による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。今回報告する比恵第155次調査では鳥栖ローム上から遺構検出を行っている。比恵遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代ナイフ型石器や彫器が台地辺縁の比恵第19次、那珂第38・41次調査で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次調査から出土している。弥生時代に入ると那珂第37次調査では2重環濠が掘削されている。比恵遺跡では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

弥生時代中期に入ると堅穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から甕棺墓の形成も始まる。弥生時代中期後半になると、比恵第58次などで検出された南北方向の区画溝が縦断し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。

弥生時代後期に入ると堅穴住居等の遺構は低調になるが、井戸等の掘削は引き続き行われている。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて堅穴住居の数は大幅に増える。これに従って、西側で行われた比恵第33・43次調査では多数の井戸が検出されている。また、比恵第2次調査では大溝の一部が確認されており、集落を囲むような環濠が確認されている。さらに、比恵第45・62・99次調査等では陵上を直線的に走る並列した2本の溝が確認されている。この2本の溝の間は、基本的に同時期の遺構が極めて少ない。また、溝是那珂遺跡群まで続いており、丘陵上を南北に走っており、総延長は1.5kmをこえている。2本の溝の間に舗装面こそ確認されていないが、道路状遺構の可能性が指摘されている。溝を掘削した年代の上限は弥生時代後期後葉であり、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたことが、出土した土器からうかがえる。この道路が首長居館との関連が指摘されている2号方形環溝や墓域等の配置に影響を与えたことが分かっている。比恵第155次調査ではこの時代の井戸跡を多数検出している。

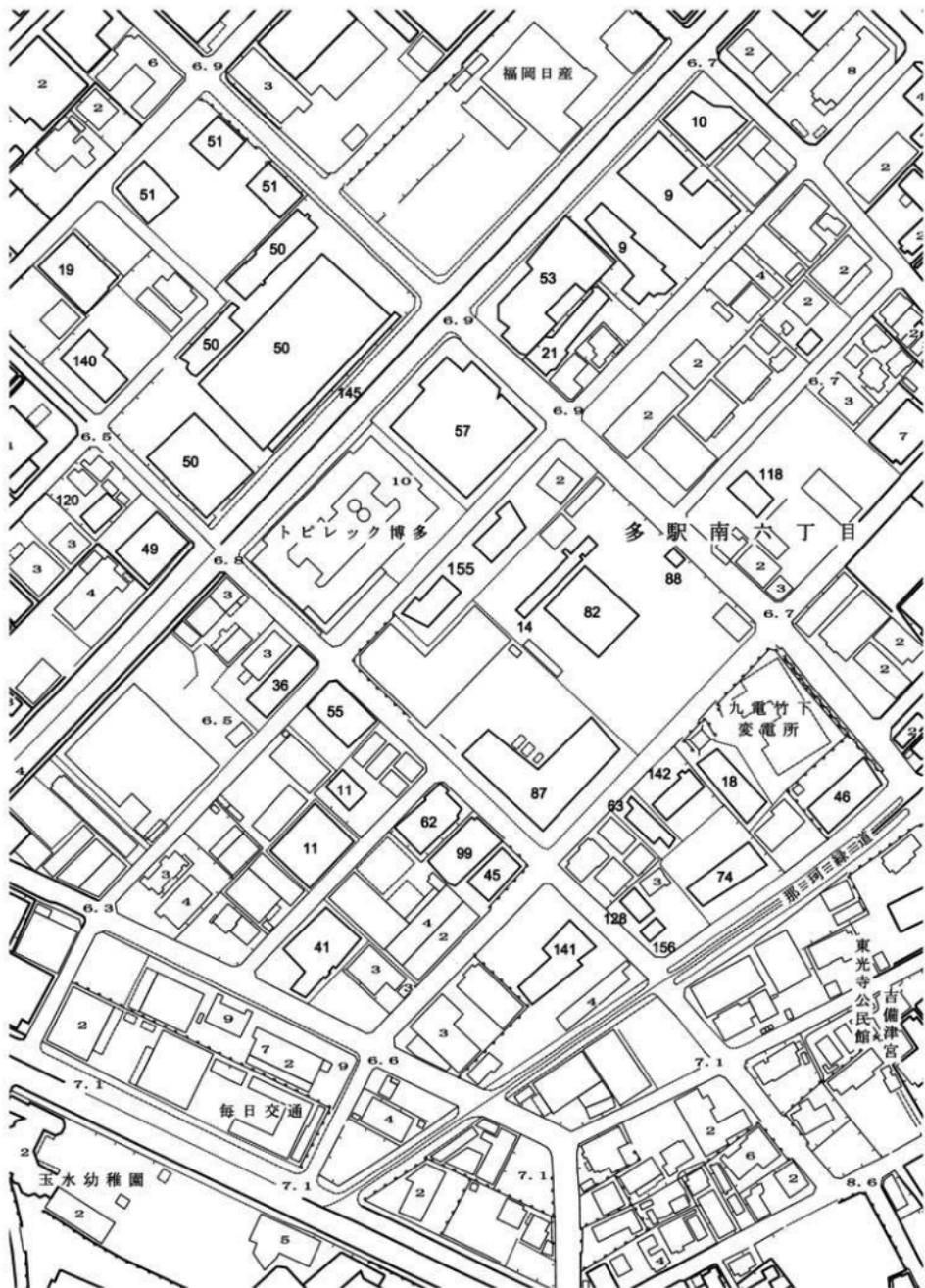
古墳時代後期には剣塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺剣塚古墳が位置している。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や欄列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536年）条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、南側に位置する那珂遺跡群についても比恵遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂第19・24次等で出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されている。

古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心是那珂遺跡群に移行する。比恵・那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田跡、弥生時代前期の環濠集落などがあり、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅剣・銅矛が出土している他、弥生時代後期の堅穴住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったとされている。また、7世紀末から8世紀初頭には寺院・官衙遺構が営まれている。

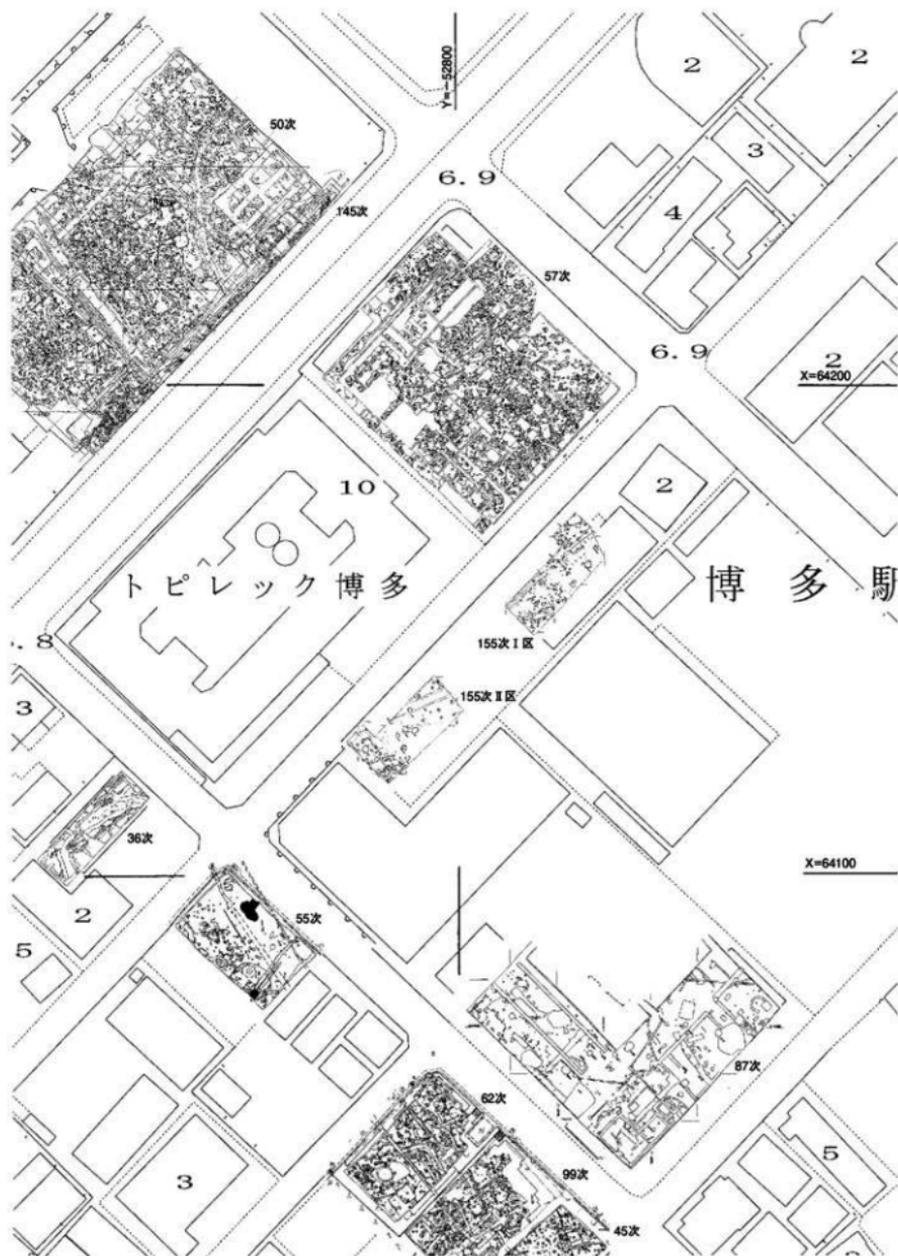


- 1.比恵遺跡群 2.那珂遺跡群 3.山王遺跡 4.五十川遺跡 5.那珂君休遺跡 6.板付遺跡 7.高畑遺跡 8.諸岡A遺跡
 9.諸岡B遺跡 10.井尻A遺跡 11.井尻B遺跡 12.井尻C遺跡 13.笠原遺跡 14.三筑遺跡 15.麦野A遺跡 16.麦野B遺跡
 17.麦野C遺跡 18.南八幡遺跡 19.横手遺跡群 20.寺島遺跡 21.臼佐遺跡 22.須玖・岡本遺跡 23.大橋E遺跡
 24.三宅B遺跡 25.三宅C遺跡 26.野多目A遺跡 27.板付東遺跡 28.井相田D遺跡 29.仲島遺跡 30.井相田C遺跡
 31.東那珂遺跡 32.雀居遺跡 33.下月隈C遺跡 34.立花寺B遺跡 35.久保園遺跡 36.席田大谷遺跡 37.宝満尾遺跡
 38.天神森遺跡 39.下月隈A遺跡 40.下月隈B遺跡 41.上月隈遺跡群 ● 155次調査地点

第1図 比恵遺跡群位置図 (1/25,000)



第2図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/2,000)



第3図 比恵遺跡群調査区位置図 (1/1,000)



第4図 調査区周辺旧地形図(1/4,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 概要

今回報告する比恵遺跡群第155次調査区は、博多区博多駅南6丁目12-3.13-3.14-3.14-4.14-7に所在し、調査前の現況は標高約6.5mを測る駐車場解体後の平地であった。調査地点は遺跡の中央南側に位置し、隣接する北側では第57次、同様に南側では第14次、82次の各調査が実施され、更にその周囲でも数多くの調査が進んでいる（第2・3図）。

「Ⅱ. 遺跡の立地と環境」でも触れた通り、比恵遺跡群はASO-4の噴火により形成された台地上に位置しており、本調査区もその台地上に位置している。本調査区の土層は調査前の駐車場時のアスファルト撤去後の客土のほぼ直下で遺構面である鳥栖ローム層が広がる（Ⅰ区北側で標高6.4m、南側で6.6m、Ⅱ区北側で標高6.6m、南側で6.9m）。遺構面はⅠ区・Ⅱ区両方に攪乱がひどく残り、両区画共に東側が後世の開発によって削られており鳥栖ロームの下層、八女粘土層での遺構検出となった。そのため攪乱の中では、井戸および深い遺構しか検出されなかった。また、特にⅠ区では、攪乱の中の井戸は油の匂いがひどく、埋土も油で汚染されたような状態であった。

遺構検出はⅠ区・Ⅱ区共に、遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人力によって掘削を行った。第155次調査では弥生時代後期以降の掘立柱建物跡をはじめ、竪穴住居跡、井戸、溝、土坑などが発掘された。出土遺物量は、コンテナケースにして72箱である、特に溝と井戸から完形もしくは、完形に近い土器が多数検出された。

発掘調査は令和元年（2019）年12月9日に、Ⅰ区の東側から重機による表土剥ぎ取りから着手した。その後発掘機材やリース機材を搬入した。12月11日から遺構検出を開始し、遺構面保護、壁面清掃、世界測地系によるトラバース杭の設定を実施した。順次、東側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げなどを行った。その後、令和元年1月17日に高所作業車を使用した全体写真撮影を行った。Ⅰ区に残る図化等を終えた1月27日にⅠ区の調査を終了し、1月29日に埋め戻しを終えた。

Ⅱ区はⅠ区の調査終盤の作業と並行して、1月22日に西側から重機による表土剥ぎ取りを開始し、1月28日から遺構検出を開始した。その後一旦重機はⅠ区の埋め戻しのためⅡ区を離れたが、2月3日に重機による表土剥ぎを終えた。その後の流れはⅠ区と同じで、3月12日に高所作業車を使用した全体写真撮影を実施し、3月24日に重機による埋め戻しを終え調査を終了した。

今回実際に作業を行ったのはⅠ区・Ⅱ区合わせて433.56㎡であった。調査時の遺構番号はⅠ区が001からで、Ⅱ区は201からの通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には欠番はあるものの、重複はない。以下の報告にあたっては、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせで記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP1から順に番号を付した。

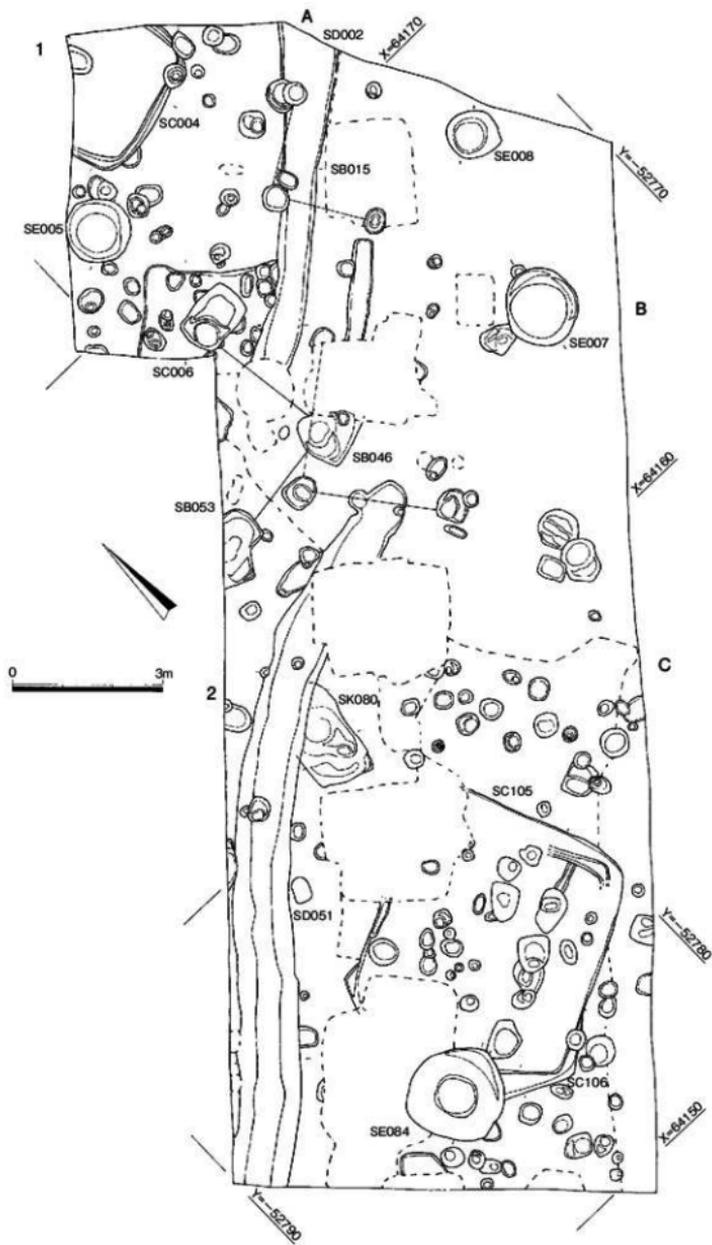
2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（北から南にA～F）と数字（東から西に1～5）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第5・20図参照）。報告はⅠ区Ⅱ区の順で行う。

Ⅰ区

1) 掘立柱建物（SB）

以下Ⅰ区で検出した3棟の掘立柱建物について報告する。



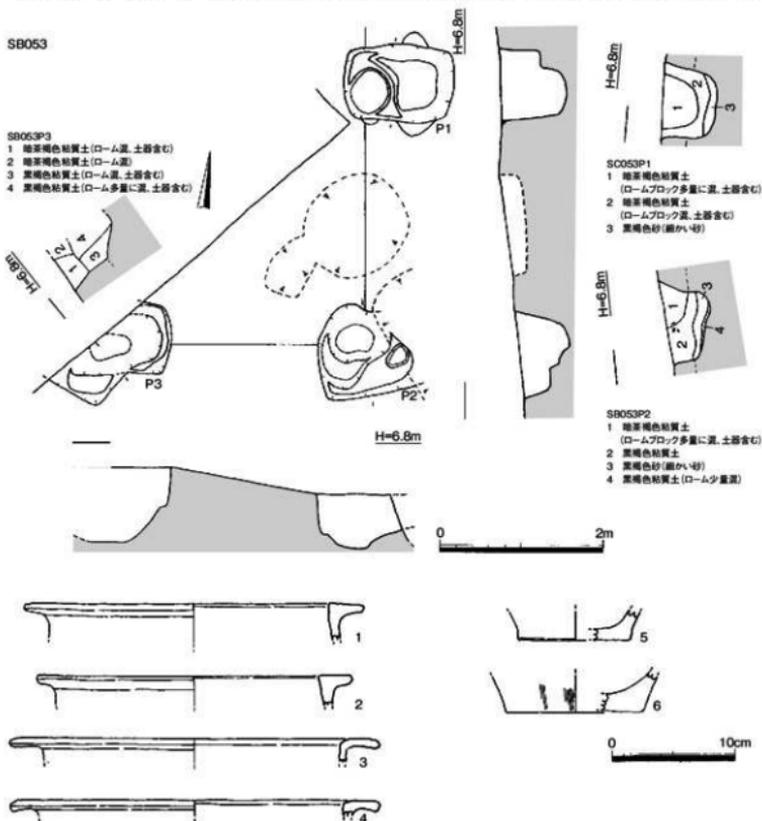
第5图 I区全体图 (1/100)

SB053 (第6図) I区北側のB-1区で検出した。SC006にP1が切られる。そのためP2・3は遺構検出の段階で認識できたが、P1については竪穴住居の下にあり検出が遅れたため、まとまった土層図は取れなかった。P1から1.35m×0.92mの大型の柱穴を持つ。柱間は梁行2.3m、桁行1.76mである。北方向にはSE005が確認できるが、SB053に伴う柱穴の痕跡が確認できなかったので西側の調査区外に伸びると考えられる。弥生時代中期後半頃に位置づけられる。

出土遺物 (第6図) 1～6は甕である。1～4は口縁部で逆L字状の口縁部を持つ。1は口径約27.6cm、2は口径25.6cm、3は口径約30.0cm、4は口径約30.0cmに復元できる。5、6は底部の土器片である。6は底径約11.0cmで外面には刷毛目調整が確認できる。

SB015 (第7図) I区東側のAB-1区で検出した。南東側は掘乱のため検出レベルが下がっており、北東側は調査区外のため検出できなかった。柱間は約1.6mである。弥生時代中期後半ごろに位置づけられる。

出土遺物 (第7図) 7、8は甕の底部である。7は底径約10.0cm、8は底径約9.0cmに復元できる。



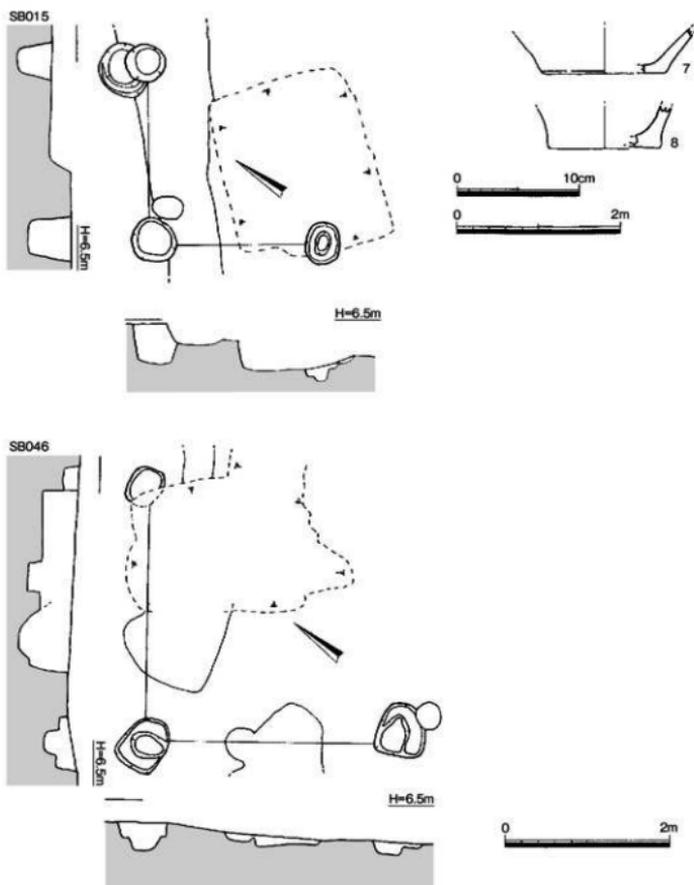
第6図 SB053実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/4)

SB046（第7図）I区中央東よりのB-12区で検出した。SB046は攪乱の中にあり、攪乱は南・東に行くほど深くなっており、検出できた柱穴は3基にとどまる。柱間は2.5～2.6mを測る。

2) 竪穴建物 (SC)

SC004（第8図）I区の北側A-1区で検出した。覆土は暗茶褐色土で、東西の幅は約3.1m、深さ約0.2mを測る。明確な柱穴は確認できなかった。P1が柱穴にあたるかもしれないが、深くはない。深さ0.15～0.2mの壁溝が周囲を巡る。弥生時代中期後半に位置づけられる。

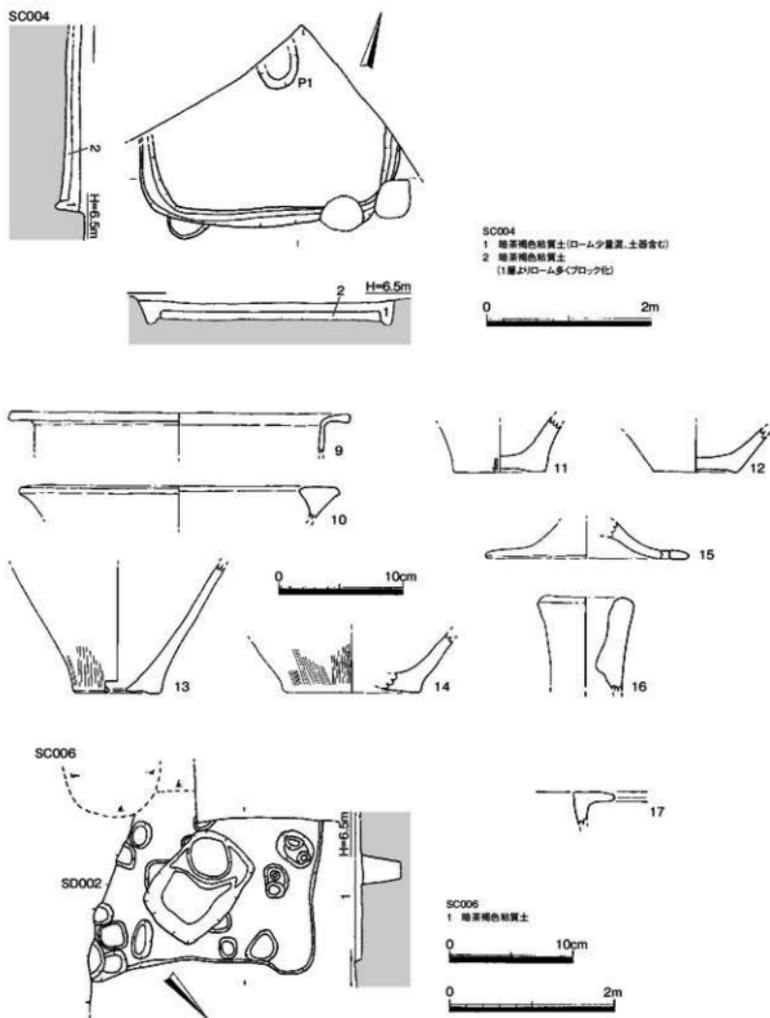
出土遺物（第8図）9～16は弥生土器である。9～14は甕である。9は口縁部～頸部の破片で、逆L字状の口縁部を持つ。口径約27.4cmである。11～14は底部である。11は底径11.4cmで、外面は刷毛目



第7図 SB015・046実測図（1/60）およびSB015出土遺物実測図（1/4）

調整が確認できる。13は底部に穿孔が確認できる。15は高杯の脚部で2カ所穿孔が確認できる。16は支脚である。

SC006（第8図）I区の北側、AB-12区で検出した。南西側は攪乱に削られ、一部は調査区外に伸びる。また、南東側はSD002に切られる。覆土は暗茶褐色土で、深さは0.1mほどであった。時期は



第8図 SC004・006実測図 (1/60) および出土物実測図 (1/4)

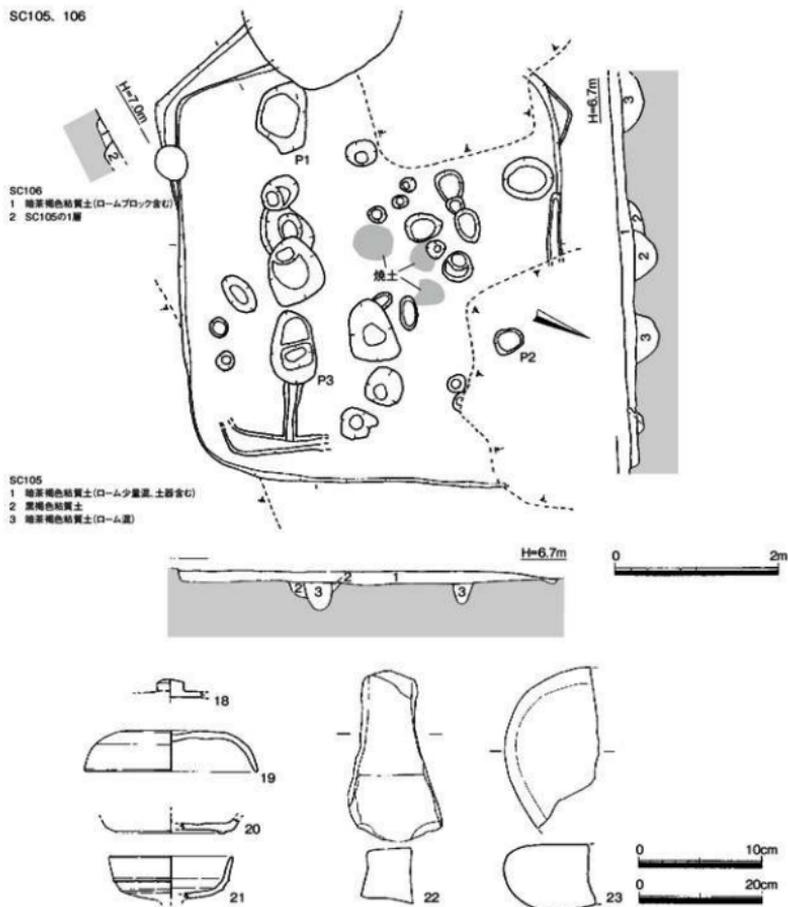
弥生時代中期後半である。

出土遺物（第8図）17は弥生土器の甕で逆L字状の口縁部を持つ。

SC105（第9図）I区の南側、C-2区で検出した。4本柱の掘建柱建物である。覆土は暗茶褐色粘質土でSC106を切る。規模は約4.65×5.1mで、深さ約0.15mであった。柱穴の深さは約0.5mである。竈穴住居の中心付近では埋土の中に焼土が薄く広がっていた。8世紀後半頃に位置づけられる。

出土遺物（第9図）18～21は須恵器である。18、19は坏の蓋で、18は蓋の中央につまみが付く。19は口径13.8cm、高さ3.3cmである。20は坏身で底に高台が付く。21は高坏である。22は砂岩製の砥

SC105, 106



第9図 SC105・106実測図（1/60）およびSC105出土遺物実測図（1/4、23は1/8）

石である。23は閃緑岩の台石である。厚さ10.7cmを測る。上部はつるつるしているが、他はざらざらしている。

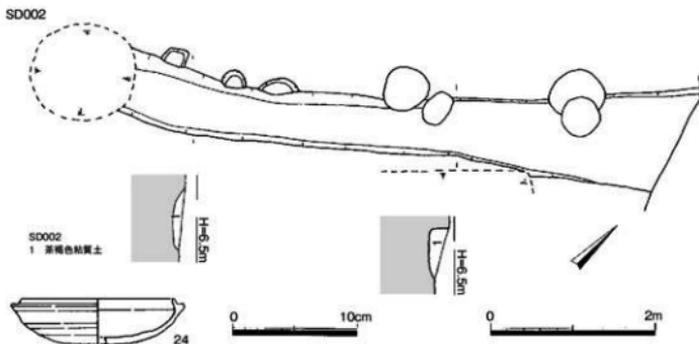
3) 溝 (SD)

SD002 (第10図) I区の北側、AB-1区で検出した。幅約0.8m以上、深さ約0.1~0.25mを測る。西側は攪乱により壊されており、攪乱よりも西側では検出されなかった。また、東側では一部オーバーハングしている箇所がある。覆土は茶褐色粘質土で、埋土から土器片が数点だけ検出された。6世紀後半の溝である。

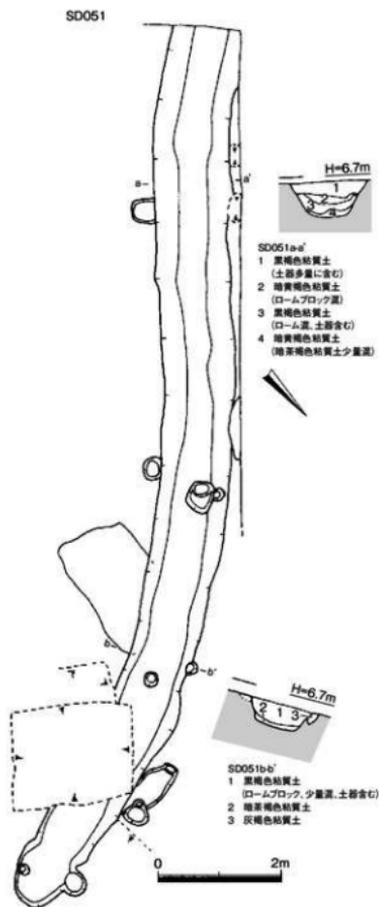
出土遺物 (第10図) 24は坏身である。口径12.4cm、高さ約3.7cmを測る。

SD051 (第11図) I区のBC-12区で検出した。幅約1.0m、深さ約0.3mの溝である。東側では攪乱により消滅してしまうが、本来なら続いていたと想定される。a-a'、b-b'共に掘直しが土層観察から確認でき、各1層の黒褐色粘質土がそれに該当する。時期は古墳時代後期である。a-a'の2・3・4層、b-b'の2層は弥生時代後期中頃に該当する。a-a'、b-b'共に層ごとに土器を分けていたが、土器洗いの際に両方一緒に洗ってしまったようである。

出土遺物 (第12、13図) 先に述べた通り、遺物が何層から出土したかわからなくなってしまったので、まとめて記す。25~33は須恵器の坏で、25~28は坏蓋である。25は口径12.0cm、高さ3.7cmである。口縁の内側に段を設ける。26は口径約12.8cm、高さ約3.8cmを測る。27は口径約12.7cm、高さ4.4cmである。28は口径12.4cm、高さ4.1cmである。29~33は坏身である。29は口径13.0cm、高さ4.6cm、外面に自然軸がかかる。30は口径13.2cm、高さ3.8cmを測る。31は口径10.6cm、高さ4.2cmである。32は口径約13.2cm、高さ4.6cm、胎土には径3mmの砂礫が混じる。33は口径約12.8cm、高さ4.4cmである。34~37は土師器の坏である。34は口径約12.0cm。35は口径約12.1cm、高さ約4.5cm、胎土は緻密である。36は口径11.5cm、高さ4.5cm、胎土に径5mmの砂礫が混じる。37は口径11.5cm、底径4.1cm、高さ5.9cmである。底部は葉に乗せていた痕跡であろうか、葉脈が残る。38は土師器の鉢である。口径約13.6cm、調整は摩滅している。39は須恵器の甕である。40~42は土師器の壺である。40は口径約12.0cmの復元できる。底部には葉脈のような痕跡が確認できる。43は弥生土器の壺の底部である。44は鉢で、口径10.7cm、底径4.4cm、高さ6.3cmである。外面は刷毛目調整、外面上部から内面にはナデが確認できる。45は弥生土器の複合口縁壺である。口径約22.0cmに復元できる。外面に鋸歯文がみられる。46は支脚である。47~49は瓶である。47は口径約20.6cm、



第10図 SD002実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)



第11図 SD051実測図 (1/80)

外面は刷毛目調整。49は把手がないが底部には穴が開いており、これは焼成前からの穴である。50は小型丸底壺。51、52はミニチュア土器である。

4) 井戸 (SE)

I区では4基の井戸が検出された。

SE005 (第14図) I区の北側、A-1区で検出した。検出面での径は1.29m、底径は0.76m、深さ2.03mを測る。SB053の箇所を述べたが、切り合いを含めSB053の柱穴の痕跡は確認できなかった。古墳時代前期の井戸である。

出土遺物 (第14図) 53、54、56は下層からの出土である。53～55は壺である。53は口径14.4cm、最大径17.4cm、高さ19.0cmを測る。内外面共に口縁部から頸部までをナデ調整、外面胴部は刷毛目調整である。54は口縁部と底部を欠く。内外面共に口縁部はナデ調整、外面胴部には刷毛目調整が確認できる。55は壺の上部である。口径約14.6cm、調整は摩滅して不明である。56は鉢である。口径13.4cm、高さ3.7cmで内外面共にナデ調整である。

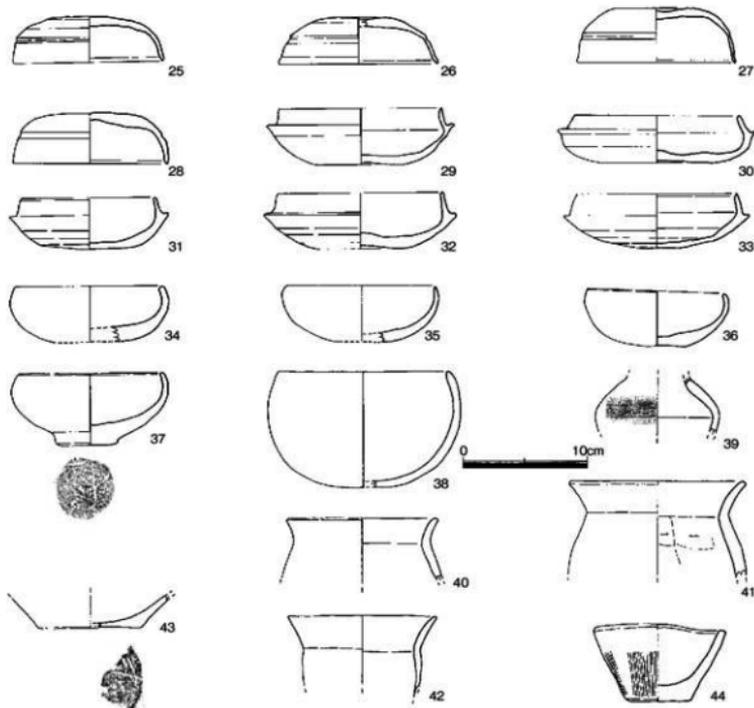
SE007 (第14図) I区のB-1区で検出した。攪乱内に位置しており、底まで浅いと予想されたため、土層図をとろうとしたが、油の匂いが強く残っており、土自体も油が染みており断念した。検出時の径は1.67m、深さは0.95m、底径は0.72mである。南側・東側は段上に掘られていたようである。一番下の段には井戸枠が組まれた形で残っていた。また、底にも木が敷かれている状態であった。古墳時代後期の井戸である。

出土遺物 (第14図) 57、58は須恵器の壺である。57は口径約16.0cmである。58は口径15.4cmで、ヘラ状工具による線刻が確認できる。59は甕である。口径約16.0cm、外面には刷毛目が確認でき、内面はナデが見られる。60は井筒の下部南側の一部

である。現在長は43.8cm、幅10.5cm、厚さ3.4cmである。3.7cm×5.0cmの四角い穿孔が確認できる。表面は傷んでいて削り痕などは不明である。別の用途で使用していた木材を転用したものか。

SE008 (第15図) I区の北側、B-1区で検出した。検出面での径は0.94~1.12mと楕円径を呈する。底径は0.6m、深さ1.73mである。鳥橋ローム層から八女粘土層上面までを上層、それ以下を下層とした。

出土遺物 (第15図) 61、62は上層からの出土である。また、63~66は下層の出土である。61は壺の上半部。口径18.6cmを測る。外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、頸部に一条凸帯を巡らす。胴部はナデが確認できる。また、内面は指押さえ、ヘラの痕が残る。62は土製品の甗である。柄が欠損する。残存長6.8cm、幅4.4cm、高さ3.8cmである。全面を指押さえたあと、ナデで調整している。63~66は製塩土器である。63は口径14.8cm、高さ約15.2cmを測り、ほぼ完形である。内外面の口縁部から頸部はヨコナデ、胴部外面は格子目状の叩き、内面は平行叩きが確認できる。64は口径14.6cm、高さ15.5cmを測る。口縁部に1段窪みを巡らし、調整は口縁部から頸部までをヨコナデ、胴部内外面を平行叩きで仕上げられる。65は甗の底部である。色調は内外面共に黒変している。外面に平行叩き、内面に叩きが確認できる。66は甗の底部から胴部である。外面には叩きらしき痕跡があるが、器面が剥落しており不明瞭である。内面には粗いヘラ削りが確認できる。色調は内外面共に煤が付着し黒ずん

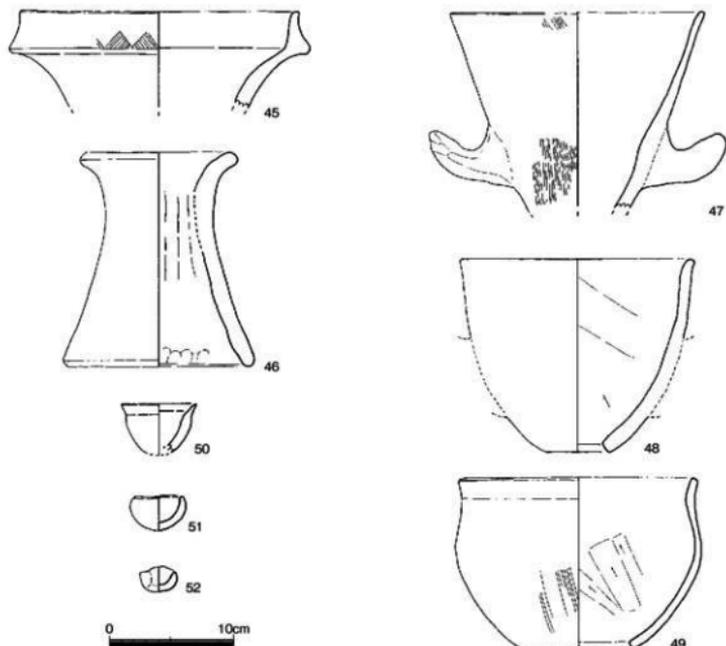


第12図 SD051出土遺物実測図1 (1/4)

でいる。67は土師器で、甕の胴部から底部が残る。外面は細い刷毛目の後、丁寧な磨きが確認できる。内面はヘラ削りで仕上げる。1か所黒斑が確認できる。

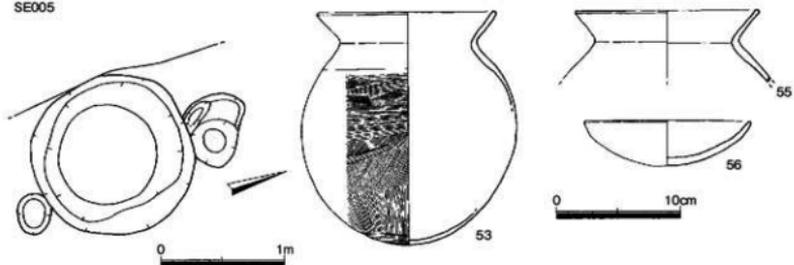
SE084 (第15図) I区の西側、C-2区で検出した。遺構検出時の径は1.94mである。底径0.69m、深さ2.21mを測る。断面は漏斗状になり、南西側に幅約0.25mの段を設ける。底からかなりの量の土器が出土したが、底部付近は湧水が激しく、出土状況などの実測はできなかった。8世紀後半の井戸である。

出土遺物 (第15、16図) 68~70は上層から、71~87は下層から出土した。68は口径19.0cm、底径14.8cm、高さ2.4cmを測る須恵器の皿である。69は石包丁である。幅5.1cm、厚さ0.6cmである。70は叩き石である。長さ18.1cm、幅11.2cm、厚さ7.0cmを測る。閃緑岩製である。71~73は須恵器の坏である。71は口径12.8cm、底径9.6cm、高さ2.7cmである。72は口径13.3cm、底径9.4cm、高さ3.5~3.8cmを測る。73は底に高台が付く。口径13.5cm、底径8.9cm、高さ3.8~4.1cmである。また底に墨書で「日之」もしくは「田之」と記す。74、75は短頸壺である。口径約10.1cm、底径9.1cm、高さ12.5cmを測る。75は口径8.7cm、底径10.2cm、高さ16.5cmを測る。肩部に自然軸がかかる。また、肩に3か所耳が付き、その中心に穴が開く。紐を通したのであろうか。76は長頸壺である。底径11.1cm、高さ21.3cmが残る。一部に自然軸がかかる。77~87は土師器の甕である。77は口径18.9cm、高さ17.2cmを測る。外面の胴部と内面の口縁部から頸部にかけては刷毛目調整、内面胴部上半部

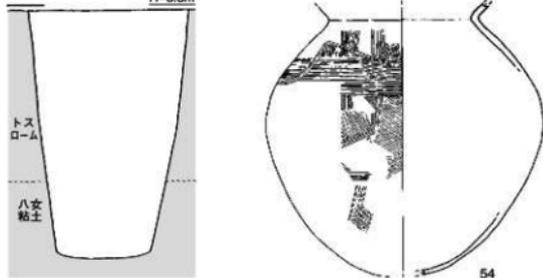


第13図 SD051出土遺物実測図2 (1/4)

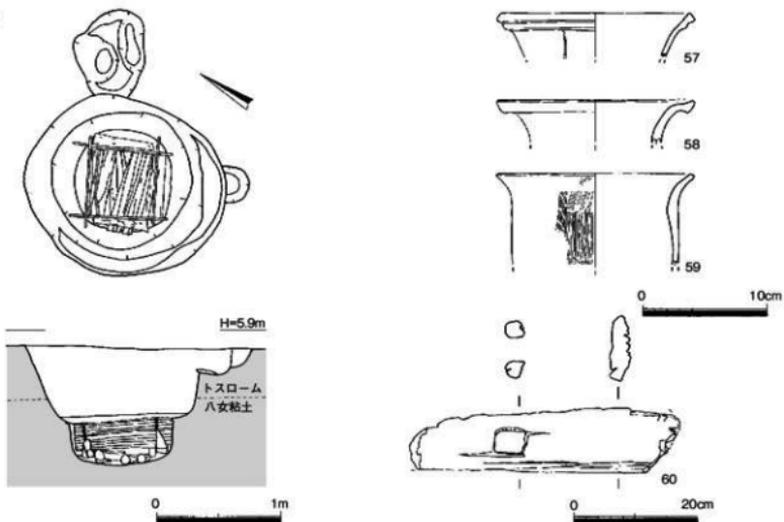
SE005



H=6.5m



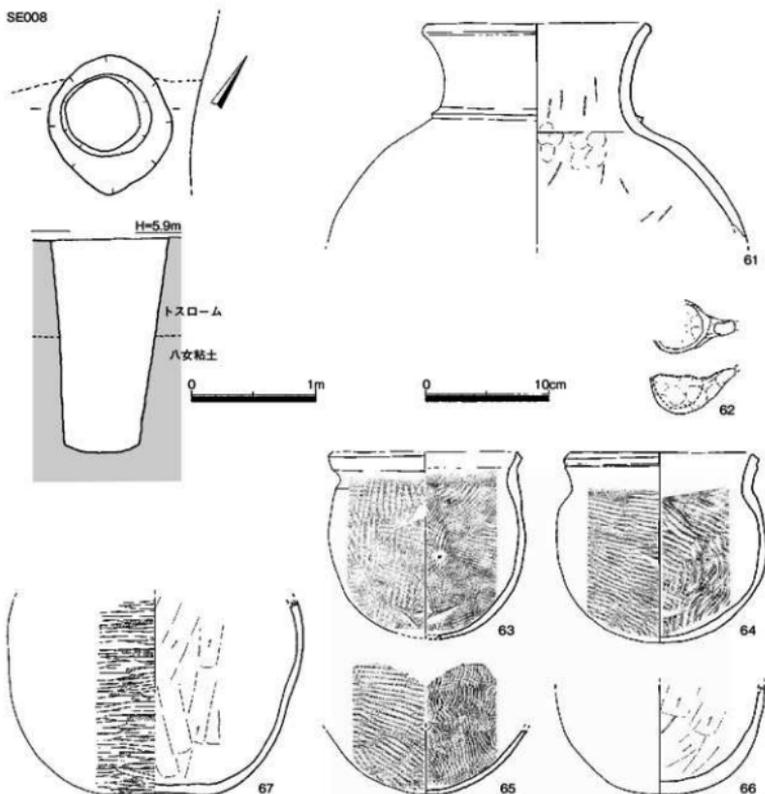
SE007



第14図 SE005・007実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/4、60は1/8)

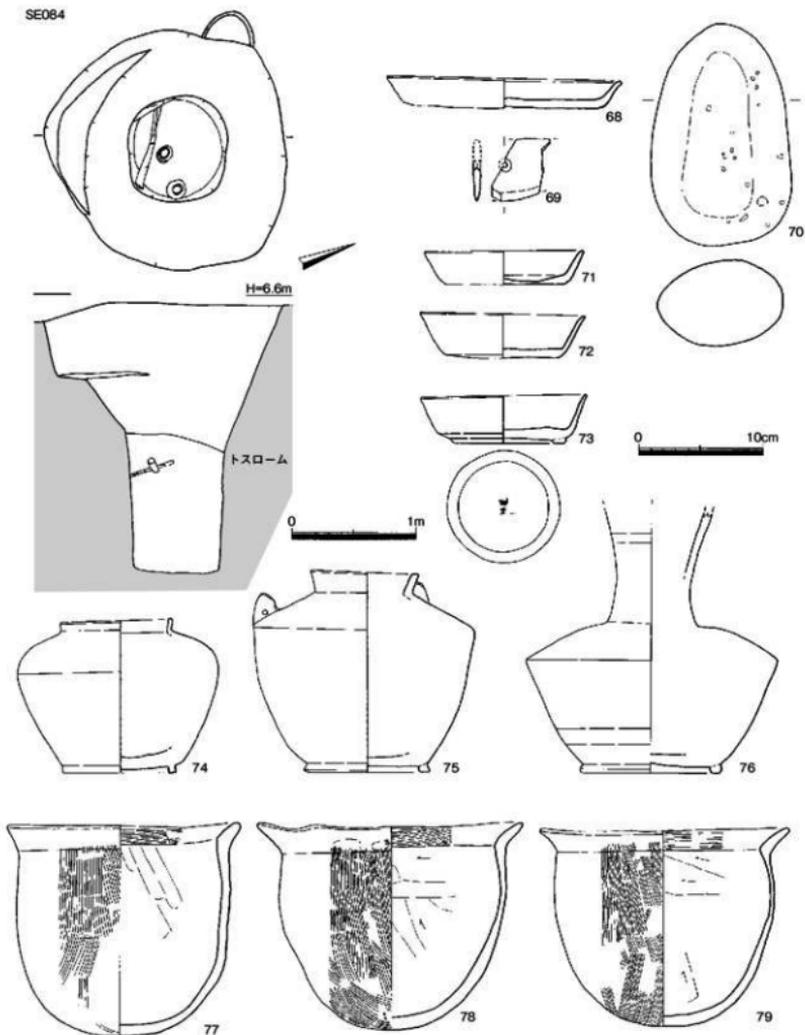
は削り、下半部はナデである。78は口径21.5cm、高さ16.7cmを測る。外面の頸部には指押さえがみられる。頸部から下の外面には刷毛目調整、内面胴部上半部は削り、下半部はナデである。79は口径22.0cm、高さ16.0cmを測る。外面は刷毛目調整、内面の口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部は全体をヘラ削りで調整している。また、内外面共に煤で黒く変色している。80は内外面に黒斑が確認できる。81は口径19.4cm、外面は刷毛目調整が確認できる。82は口径19.7cm、高さ16.2cmを測る。外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。83は口径17.8cm、高さ13.8cmを測る。外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。84は口径19.4cm、高さ14.6cmである。外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。85は口径19.1cm、高さ14.6cmを測り、外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。86は口径17.2cm、高さ13.9cmである。外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。87は77～86と比較すると

SE008



第15図 SE008実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

SE084



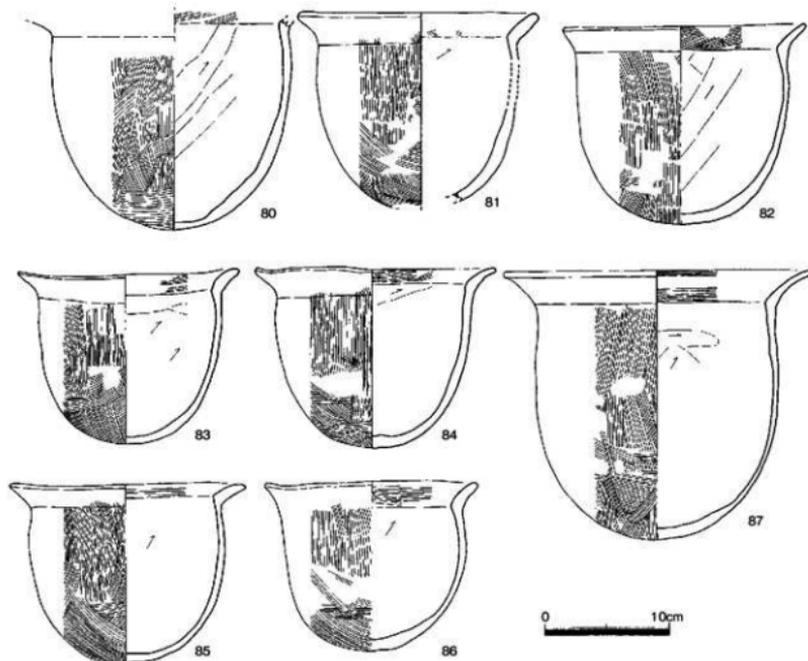
第16図 SE084実測図 (1/40) および出土遺物実測図 1 (1/4)

一回り大きい。口径24.8cm、高さ22.0cmを測り、外面の頸部から胴部は刷毛目調整。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整、胴部はヘラ削りである。胴部に黒斑が確認できる。

5) 土坑 (SK)

SK080 (第18図) I区中央のB-2区で検出した。幅は1.25～約1.4m、深さ0.25～0.55mであり、一部をSD051に切られる。SK080の長辺は南北方向である。SC053の柱穴は長辺が南北方向であり、90度方向が違う。土坑と報告するが、未発掘部分に柱穴があり、掘立柱建物の可能性がある。弥生時代中期中頃から後半にかけての時期である。

出土遺物 (第18図) 88～93は甕である。88は約32.0cmの口縁部を持つ。口縁部の形状は逆L字形である。89はT字型の口縁部を持つ。口径は約32.0cmに復元できる。90は逆L字状の口縁部を持つ。91は口径29.4cm、高さ16.9cmが残る。外面には刷毛目調整が一部残る。92、93は底部である。92は底径7.9cm、外面には刷毛目調整が残る。93は底径7.4cm、底部付近に刷毛目調整が残る。94は支脚である。高さが13.9cmあり、ナデ調整、底部には指押えの痕跡が残る。



第17図 SE084出土遺物実測図2 (1/4)

Ⅱ区

Ⅱ区(第19図)は「Ⅲ-1」で述べた通り1月22日から表土剥ぎを開始した。

6) 掘立柱建物(SB)

SB233(第20図)Ⅱ区の南側E-4区で検出した。柱間が0.7~1.1m、深さ0.5~0.7mの掘立柱建物である。南東-北東間には間に柱穴があったかもしれないが、井戸・攪乱に切られ不明である。また、北側の柱穴は掘り飛ばしてしまった。出土遺物は破片ばかりである。弥生時代後期頃か。

SB255(第20図)Ⅱ区の南側EF-4区で検出した。1間×2間の掘立柱建物で、柱間は南北1.05m、東西1.35~1.65mである。柱穴の深さは0.2~0.5mである。南東側の柱穴が調査区外にあると推定される。時期としては須恵器の破片が出土しており、古代か。

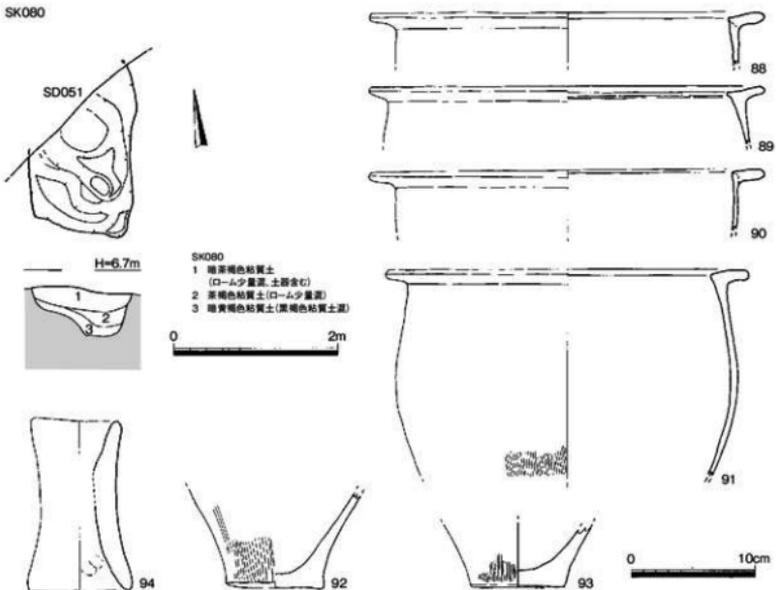
7) 竪穴建物(SC)

SC245(第21図)Ⅱ区の西側、E-5区で検出した。SC245は攪乱に切られ、調査区外に伸びていたため、全容の把握はできなかった。土坑の可能性も残る。時期は弥生時代後期中頃である。

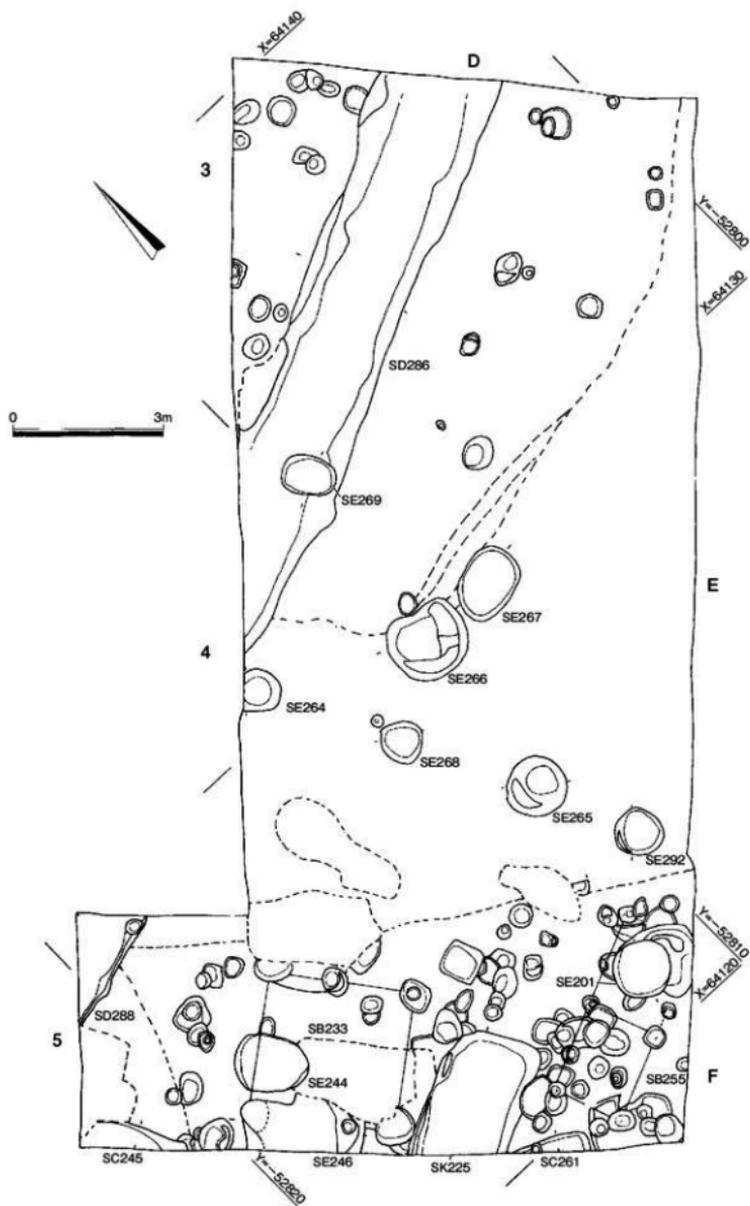
出土遺物(第21図)95、96は弥生土器で甕の口縁から胴部上半部である。95は外面口縁部から頸部をナゲ、頸部からは刷毛目調整である。内面は口縁部から頸部にかけて刷毛目調整が確認できる。96は口縁部から頸部にかけてナゲ、頸部からは刷毛目調整である。内面は刷毛目調整がみられる。97は弥生土器の甕で、胴部下半部から底部である。底径9.9cmを測る。調整は外面に刷毛目調整が確認できる。

SC261(第21図)Ⅱ区の南側EF-4区で検出した。SC261も調査区外に伸びていたため、全容の把握はできていない。また、SC245と同じく土坑の可能性も残る。時期は弥生中期後半である。

SK080



第18図 SK080実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/4)

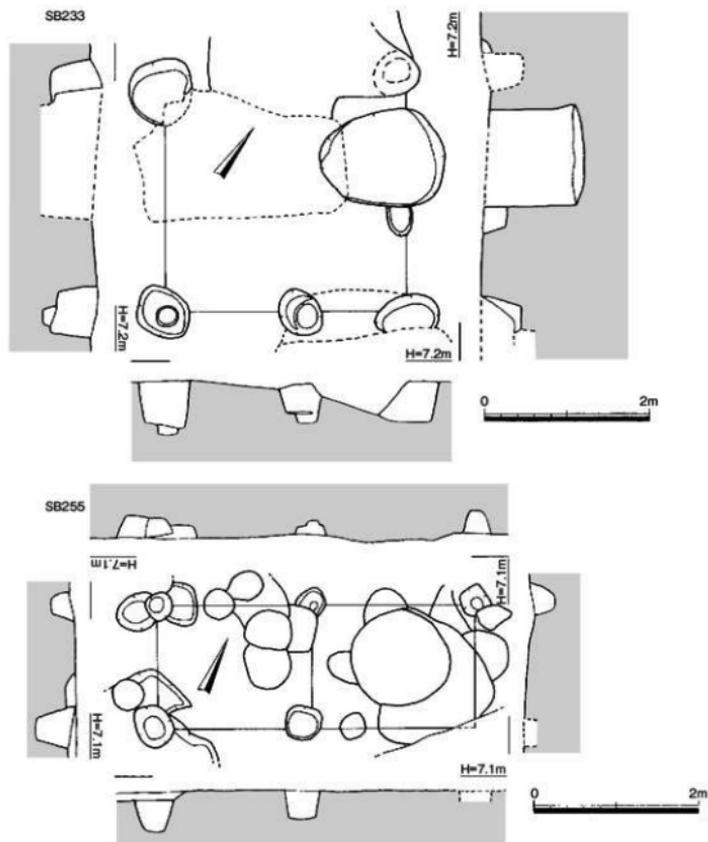


第19图 II区全体图(1/100)

8) 溝 (SD)

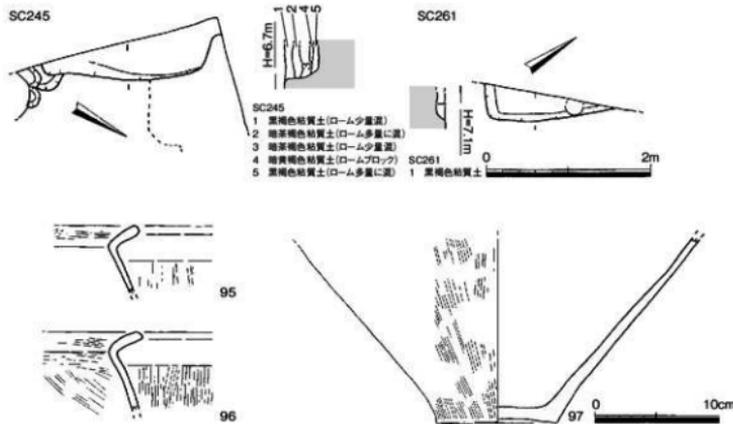
SD228 (第22図) II区のDE-3.4.5で検出した。検出時の幅は2.1~2.5m、底の幅は1.3~1.5m、深さは0.5~0.85mである。断面は逆台形を呈する。西側でも一部を検出したが、西側では浅くなるようである。断面図を見ると現状では掘り直し等の痕跡は認められない。また、断面図b-b'の4層ではとても粘性の強い粘質土が堆積し、土器は検出されなかった。2層の茶褐色粘質土では土器を多量に含む層が検出されている。時期は弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物が出土している。

出土遺物 (第23、24) 第23図の98~101までを1層、それ以外は2層以下の土器である。なお3層からも土器は出土したが、破片ばかりで図化していない。また、4層からは土器は出土していない。

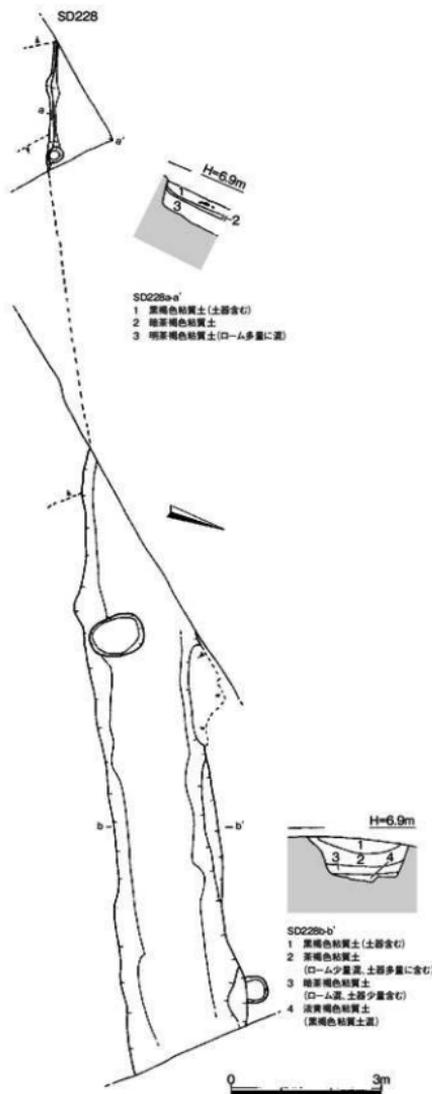


第20図 SB233・255実測図 (1/60)

98は土師器の甕である。口縁部から胴部最大径あたりまで残り、口縁部は内湾している。口径は約31.0cmを測り、口縁部内面に刷毛目が残る。99は弥生土器の甕で、口縁部である。口縁下部に文様が付く。100は絵画土器で壺の破片か。101は複合口縁壺で突帯に、文様を貼り付ける。また、内面にも刷毛目工具で描いた文様が残る。102は土師器の壺である。口縁部が欠損しているが、大部分は残る。胴部最大径は24.5cmを測り、1カ所穿孔孔が確認できる。全面磨滅しており、調整は不明である。103は丹塗りの壺である。口径約23.2cmを測る。内面の口縁部付近と外面に丹塗りを施す。104は土師器の壺である。口径約26.6cmを測り、内外面に波状文を施す。105は直口壺で、口縁部から胴部上半が残る。口径11.4cm、外面には刷毛目が確認できる。106は壺の口縁部である。口径25.4cmを測る。外面は刷毛目調整、内面にはヘラ状工具の痕跡が残る。107は壺の口縁部から頸部が残る。口径は約13.2cmを測る。外面には横方向のミガキ、また内面は不明瞭な縦方向の条痕が確認できる。108は壺の口縁部である。口径約25cmを測る。109は壺の口縁部である。口縁端部と内面上部に文様を施す。西部瀬戸内系の土器である。111、112は壺の底部か。111は底径5.5cm、112は底径約8.6cmに復元できる。113～121は甕である。113は口径16cmで底部付近を欠く。外面には横方向のタタキ、また部分的に刷毛目が確認できる。内面の上部には不明瞭ではあるが、刷毛目調整が確認できる。114は口径15.3cm、最大径17.5cmを測り、底部を欠く。外面は口縁部から頸部をヨコナデ、胴部は刷毛目調整である。内面の口縁部は刷毛目調整が見られる。115は口径約16.4cmに復元できる。内外面共に磨滅しているが、わずかに外面に刷毛目調整が確認できる。116は口径約13cmに復元できる。器面は磨滅しており、調整は不明である。118は口径約16cm、器面は磨滅しており、調整は不明である。119は丹塗りの甕である。口径約31cmに復元できる。口縁端部に細かい刻み目が入る。120、121は甕の底部である。120は底径10cm、ナデで仕上げる。121は底径8cmを測る。タテ方向のミガキが確認できる。122～124、126～129は高坏である。122は口径約15.2cm、脚部径10.1cm、高さ9.2cmを測る。坏部の調整は磨滅しているが、脚部の内面に刷毛目調整が確認できる。123は口径約13.2cm、脚部径10.6cm、高さ6.3cmである。脚部内面には刷毛目調整が残る。124は口径12.9cm、脚部径は約7.0cm、高さ6.5cmである。126は高坏の脚部である。脚部径は約12.6cmを測る。2カ所径1cmの穿孔孔が



第21図 SC245・261実測図(1/60)およびSC245出土遺物実測図(1/4)



第22図 SD228実測図(1/100)

確認できる。内面には刷毛目調整が見られる。127、128は脚部片である。128は刷毛目が見られる。また1カ所穿孔が確認できる。129は高坏の坏底部である。

130、131は小型丸底壺である。130は1/4程度が残る。外面は刷毛目調整、内面には指押さえが確認できる。131は口径約11.4cmを測る。内面口縁部から頸部にかけ刷毛目調整が確認できる。132は瓶である。孔径1.0cmの穴が底部に確認できる。133は器台の頸部である。内外面共に刷毛目が見られる。134は杓の柄である。135は瓶形土器の口縁部である。口径24.4cmが残る。136は鉄製品で鋏先である。長さ6.6cm、幅8.1cmが残る。

9) 井戸 (SE)

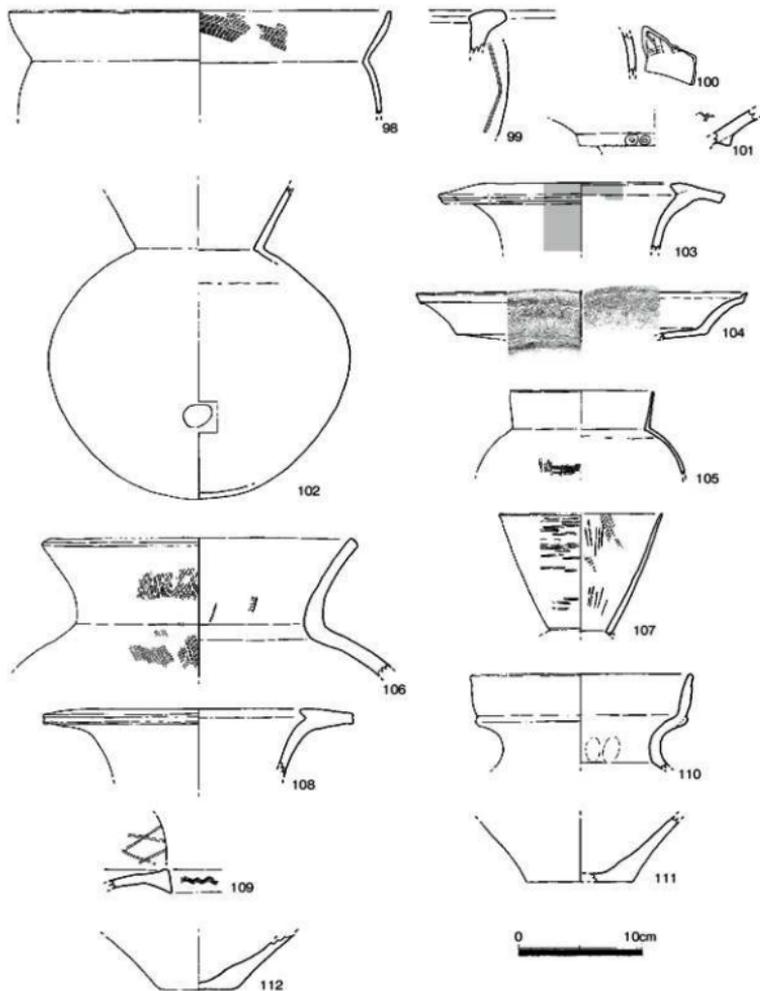
SE201 (第25図) II 区の南側、E-4 区で検出した。上部は攪乱および土坑に切られる。

上部径約1.0~1.1m、底部径は1.17m、深さ2.24mを測る。素掘りの井戸である。木が多く出土した。中でも杵は保存状態がよく残っていたが、他の木材はもろく薄く、取り外しの際にばらばらになってしまった。弥生時代後期前半から中頃の井戸である。

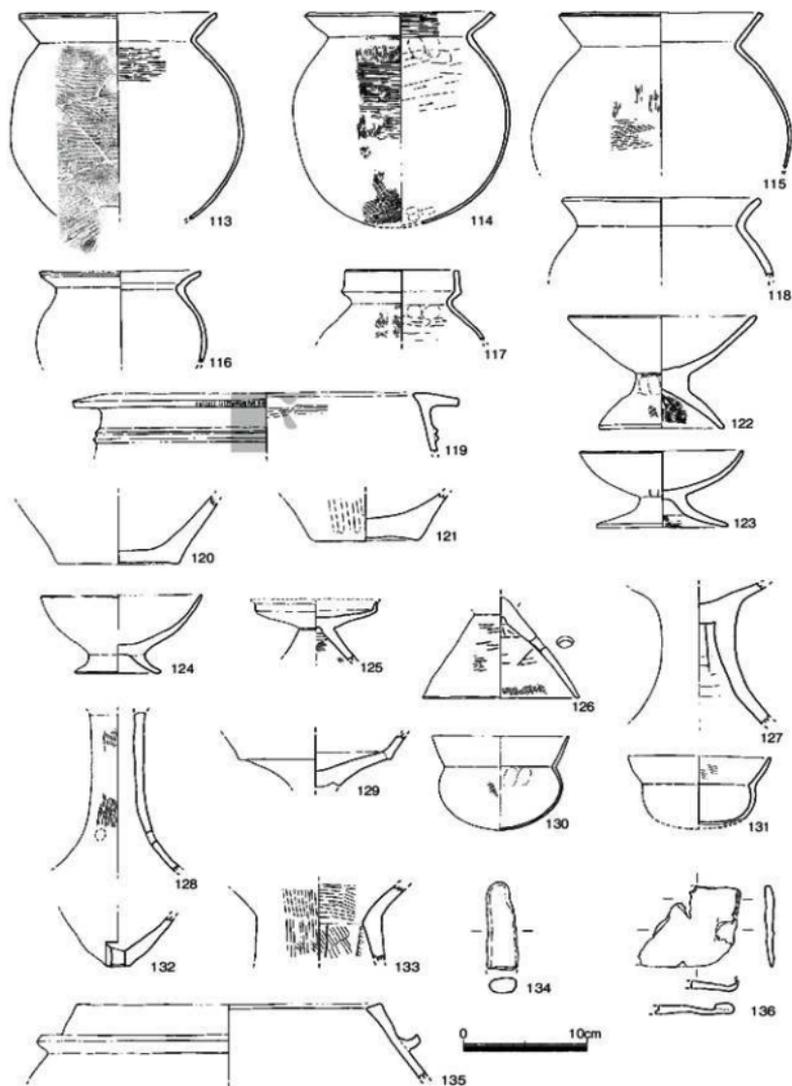
出土遺物(第25図) 137、139~142は壺である。137は長頸壺である。口径約13.8cm、底径6.0cm、高さ30.2cmを測る、口縁部は刷毛目調整、外面口縁部から頸部までを刷毛目調整後ナデ調整で仕上げる。また、頸部には1条突帯を巡らす。胴部はナデである。内面は口縁部から底部までナデ調整である。139は口径9.6cm、底径6.6cm、高さ17.4cmを測る。外面には刷毛目調整が確認できる。140は口径8.5cm、底径5.6cm、高さ19.1cmをはかり、外面口縁部から胴部の上部までをナデ調整、それより下は刷毛目調整である。141は頸部より上を欠く。底径6.0cmである。外面は刷毛目調整、内面はナデが確認できる。138は完形の甕である。口径14.9cm、底径6.9cm、高さ25.0cmを測り、凸レンズ状の底部を持つ。調整は不明である。142は底径約

6.2cmである。口縁部から胴部の上部までを欠く。143はほぼ完形の高坏である。口径15.0cm、底径11.0cm、高さ11.4cmを測る。外面上部はヨコナデ、胴部から脚部はミガキが確認できる。144は鉢である。口径約11.2cm、高さ7.1cmを測る。外面はナデ調整、内面は刷毛目調整の後、ナデ調整である。145は木製品の縦杵である。長さ94.1cm、太さ28~90.0cmである。

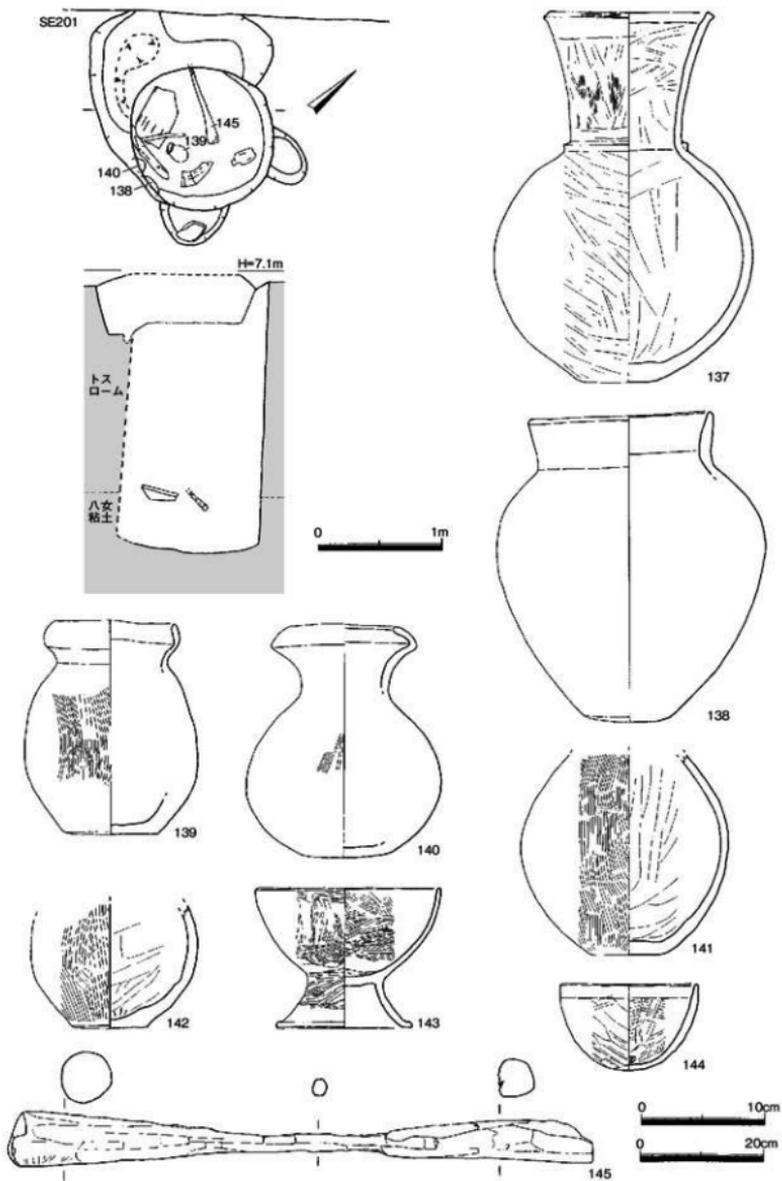
SE244 (第27図) II区の西側、E-4区で検出した。楕円形の井戸である。他の井戸は水が湧水する八



第23図 SD228出土遺物実測図1 (1/4)



第24图 SD228出土遗物实测图2 (1/4)



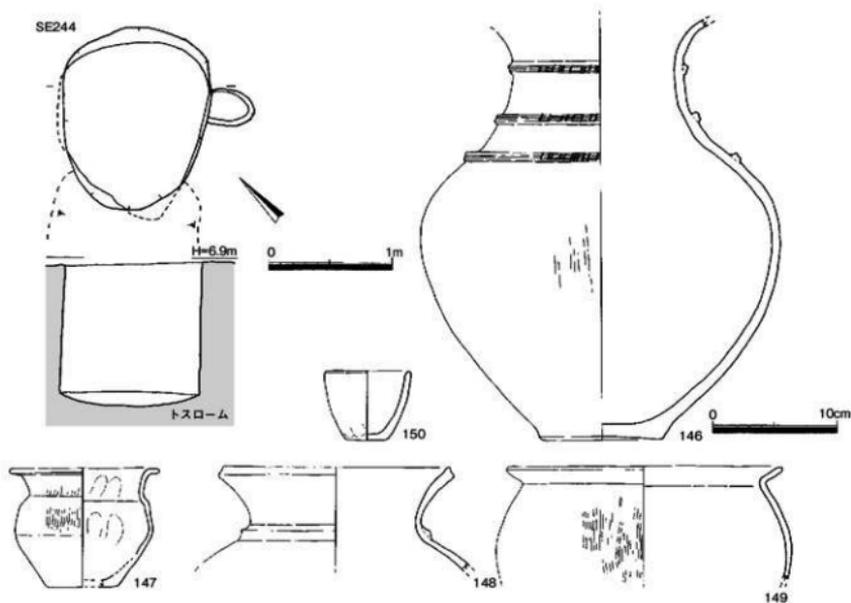
第25図 SE201実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4、145は1/8)

女粘土層まで掘削しているのに対し、SE224は鳥栖ローム面で掘削は止まっている。深い土坑の可能性もある。上部径は1.1～1.5m、深さ1.18mである。弥生時代後期中頃に位置付けられる。

出土遺物（第27図）146は壺で、底径10.0cm、高さは口縁部以外の約34.4cmが残る。頸部から胴部にかけて刻み目のある3条の突帯が巡る。また、赤彩がわずかに残る。外面の一部にナデの痕跡が残る。147、148は壺である。147は口径12.3cm、底径約5.9cm、高さ9.7cmを測る。全体的に磨滅しているが、外面には刷毛目調整が残る。148は口径約18.2cmを測る。全体的に磨滅が激しい。頸部に1条の突帯が巡る。149は甕で口径約22.4cmである。胴部から口縁部は短く屈曲する。外面には刷毛目調整が確認できる。150は鉢である。口径約7.0cm、底径約3.6cm、高さ5.7cmを測る。SD244は器面が荒れた遺物が多い印象をうける。

SE246（第28図）Ⅱ区の西側E-4区で検出した。SB233の所で述べたが、柱穴との切り会いに気づかず掘削してしまった。また、調査区外に一部出ており、安全上の理由から掘削を途中で断念した。上部の径は約2.5mを測る。時期としては古墳時代後期から古代に位置づけられる。

出土遺物（第28図）151、155は土師器の甕である。151は口径14.3cm、最大径22.5cm、高さ24.5cmを測る。口縁部は短く屈曲する。胎土は非常に分厚く、一部工具の痕跡が残る。155は口径約13.6cmを測る。外面は口縁部から頸部をナデ調整、胴部は刷毛目調整である。内面は口縁部から頸部をナデ調整、胴部は削りが確認できる。152～154は須恵器の坏である。152は壺で、口径約12.8cm、高さ5.3cmで、つまみが付く。153は身で口径11.4cm、高さ4.4cmを測る。154は蓋でほぼ完形で口径13.7cm、高さ4.3cmを測る。外面にはヘラ記号が確認できる。156は土師器の鉢である。口径16.8cm、



第26図 SE244実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

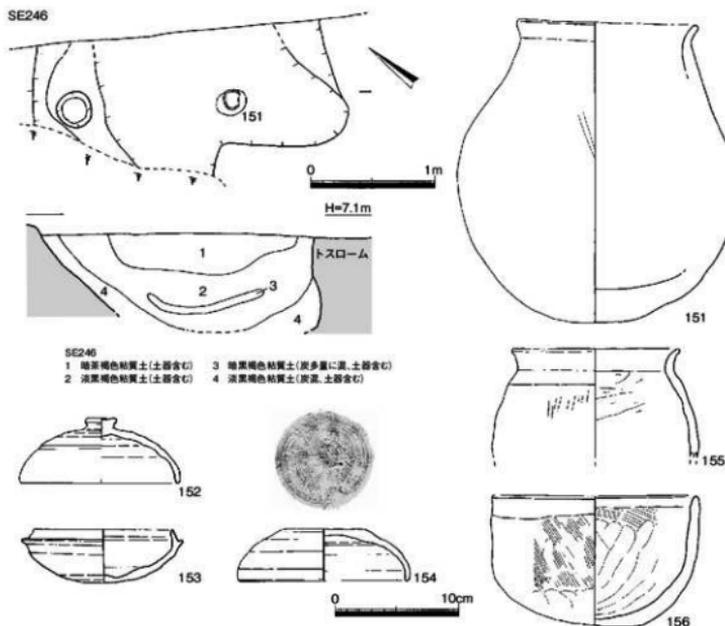
高さ10.5cmを測り、少し厚手である。調整は口縁部ではナデ、外面上部は刷毛目、下部はナデがみられる。内面の上部は刷毛目、下部はヘラ状工具によるナデ調整が確認できる。

SE264 (第29図) II区の中央西側、D-4区で検出した。上部は攪乱により切られている。上部径は0.89m、底径0.58m、高さ1.07mの井戸である。一部は調査区外にのびる。時期としては弥生時代後期中頃に位置づけられる。

出土遺物(第29図) 159、160は壺の胴部から底部である。159は胴部外面に丁寧なミガキが確認できる。内面は細い刷毛目調整がみられ、黒斑が確認できる。160は底径5.0cm、胴部最大径は約18.2cmを測り、底部は凸レンズ状である。内外面に刷毛目調整がみられ、黒斑が確認できる。161はほぼ完形の壺である。口径6.4cm、底径3.7cm、高さ7.5cmを測る。内外面共に口縁部はナデ調整、外面の頸部から下はミガキが見られる。157、158は甕である。157は口径17.8cmを測る。内外面共に刷毛目調整、外面の頸部にはヘラ状工具の痕跡が確認できる。158は口径約13.0cm、底径3.4cm、高さ17.3cmを測り、底部は凸レンズ状である。内外面共に口縁部はナデ、頸部から底部を刷毛目調整が確認でき、外面口縁部から頸部にはヘラ状工具の痕跡が残る。

SE265 (第30・31図) II区の中央南側、E-4区で検出した。上部径1.2m、底径0.62、高さ1.78mを測る正円形の井戸である。断面を見ると、中位から下位にかけて1段段差がある。時期としては弥生時代後期中頃から後半に位置づけられる。

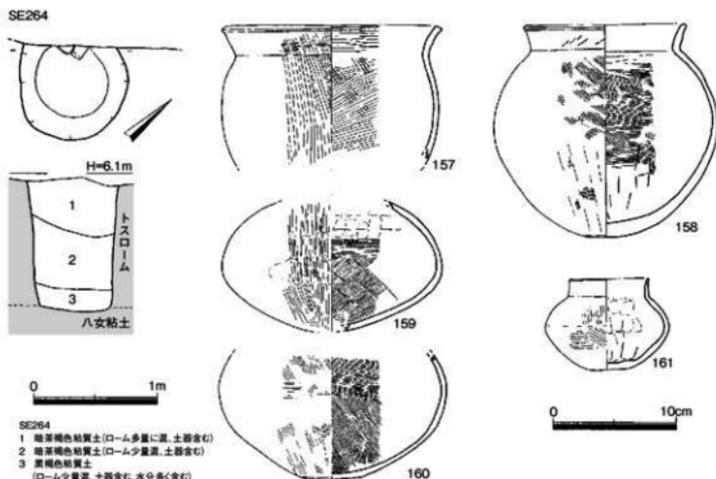
出土遺物(第30・31図) 162~165は壺である。162は口径16.2cm、底径6.1cm、高さ18.5cmを測る。163は口径16.2cm、底径7.8cm、高さ20.1cmを測り、底部は凸レンズ状である。器面は荒れている



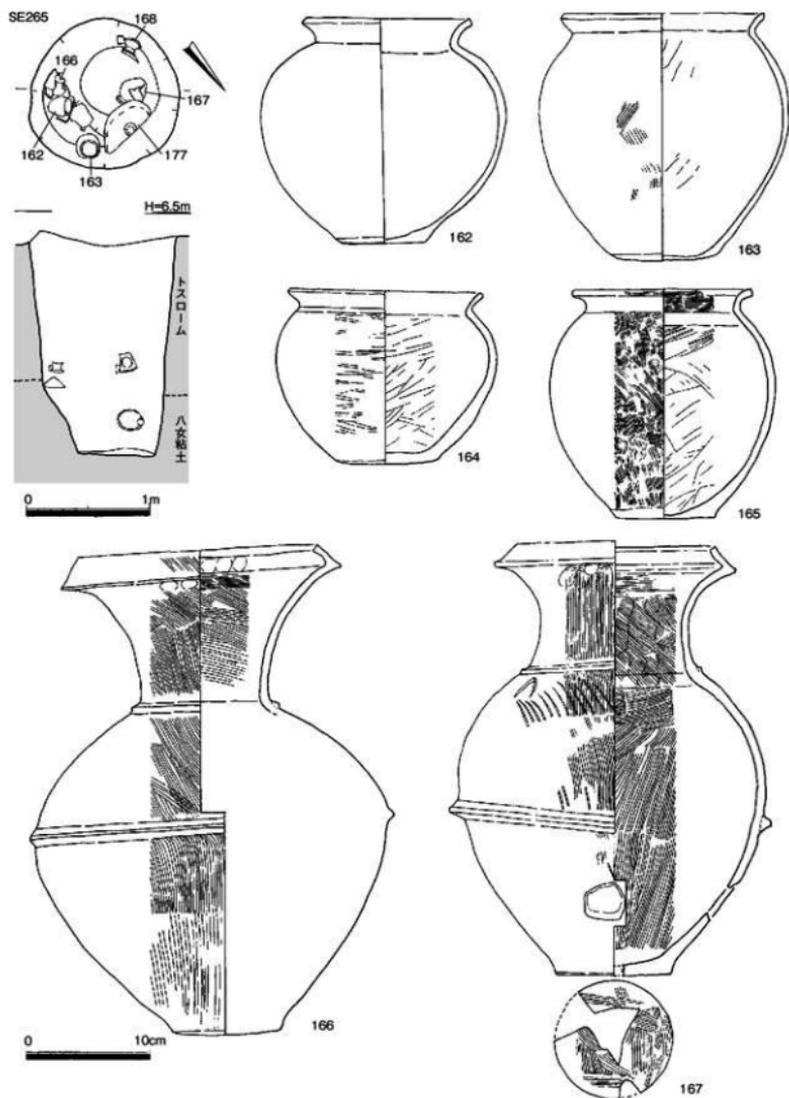
第27図 SE264実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/4)

が、外面に刷毛目調整が確認できる。164は口径約15.7cm、底径8.0cm、高さ14.2cmを測り、底部は凸レンズ状である。胴部外面はミガキ、内面はナデの痕跡がみられる。165は口径約14.6cm、底径7.9cm、高さ18.7cmである。口縁部内面と胴部外面が刷毛目調整、胴部内面はナデが確認できる。166、167は複合口縁壺である。166は口径19.5cm、底径8.9cm、高さ38.7cmを測り底部は凸レンズ状である。頸部と胴部に突帯が付く。外面、内面の頸部から胴部はナデ調整である。167は口径16.0cm、底径9.4cm、高さ35.1cmを測り、頸部と胴部に突帯が付く。内外面、底部にナデ調整が確認でき、冂字状の浮文が付く。胴部の下部には1カ所穿孔がみられる。168は袋状口縁壺である。口径15.8cm、底径7.4cm、高さ38.6cmを測る。頸部と胴部に突帯が巡る。内外面共に頸部から胴部は刷毛目調整、外面の胴部下はナデ調整が確認できる。底部の形状は凸レンズ状である。169は壺である。口縁部が欠損する。170～172は甕である。170は口径約29.0cmを測る。胴部から口縁部は「く」の字状に屈曲し、内外面共に刷毛目調整である。171は底部で底径約8.0cmを測る。内外面ともに刷毛目調整である。172は底部で底径6.5cm、底部の形状は凸レンズ状で、外面に刷毛目調整が確認できる。173、174は鉢である。173は口径14.2cm、底径6.2cm、高さ7.2cmを測る。全面剥離しており、調整は不明である。174は口径約15.0cm、底径7.0cm、高さ6.4cmを測る。口縁はナデ整形で段を作る。内外面に刷毛目調整の痕跡が残る。175は器台である。口径12.7cm、底径18.0cm、高さ19.7cmと底径の方が口径よりも大きい。176は手づくね土器である。177は台石で石材は閃緑岩である。幅57.1cm、長さ29.8cm、厚さ13.4cm、重さ30.9kgを測る。敲打痕が2カ所確認できる。178は、井戸の上層から出土した大型の甕である。甕棺として焼かれたが、何らかの理由で廃棄されたものか。大部分が残る。口径約31.0cm、底径11.5cm、高さ64.9cmを測る。口縁部から胴部は「く」の字状に屈曲し、頸部に1条、胴部中央に2条の突帯が確認できる。また、胴部下位と胴部上位の対になる箇所には黒斑がある。

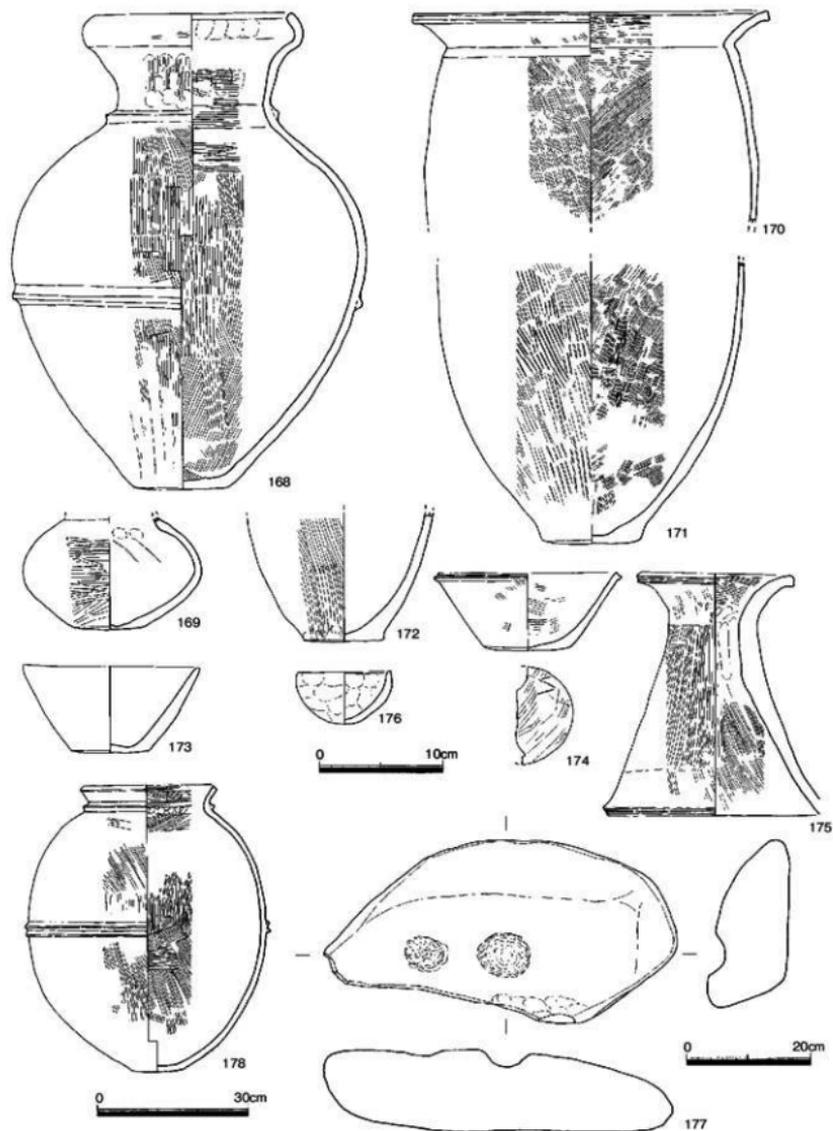
SE266（第32図）Ⅱ区の中央部DE-4区で検出した。すぐ東側ではSE267が検出されている。上部を攪乱により破壊されており、上部の径は1.67m、底部径は0.75m、高さ1.15mを測り、断面図では中位付近に段がある。弥生時代後期中頃の井戸である。



第28図 SE264実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）



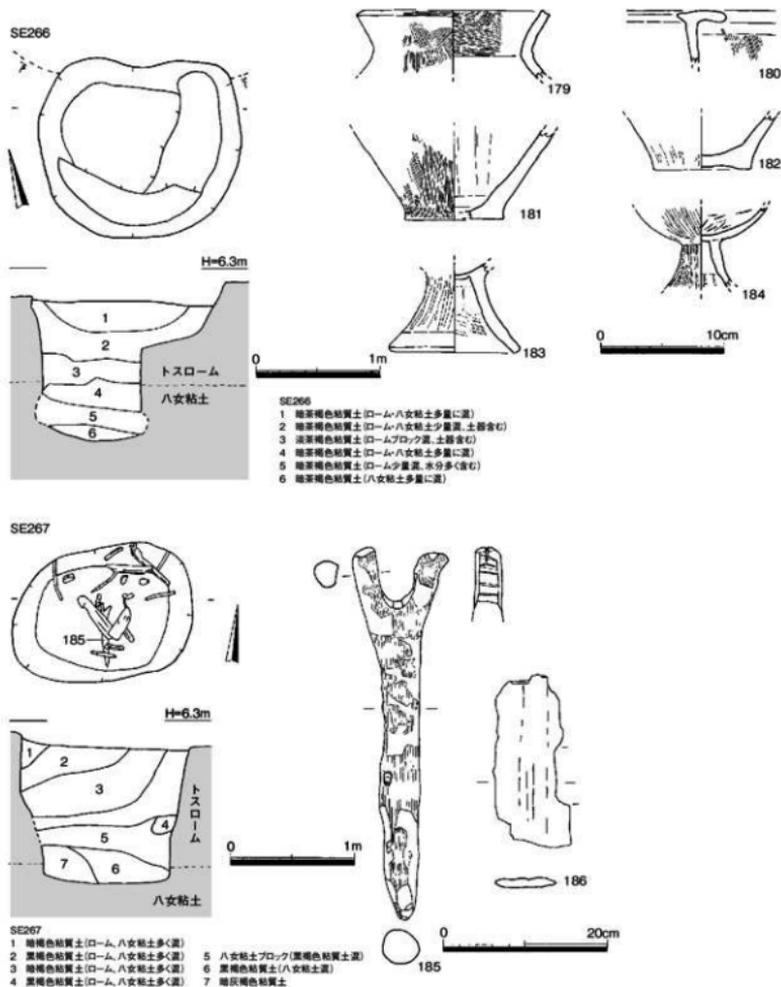
第29図 SE265実測図（1/40）および出土遺物実測図1（1/4）



第30図 SE265出土遺物実測図2 (1/4、177は1/8、178は1/10)

出土遺物（第32図）179は壺である。口径約15.6cmで、口縁部から頸部は「く」の字状に屈曲する。内外面に刷毛目調整がみられる。180～182は甕である。180は「T」字状の口縁部を持つ。181は底部で底径7.9cmを測る。底部は屈曲し、外面には刷毛目調整、内面はナデが確認できる。182は底部で底径7.9cmである。183、184は高坏である。183は脚部で底径10.6cmを測る。外面にはミガキが見られる。184は内外面共にミガキが確認できる。

SE267（第32図）Ⅱ区の中央部DE-3.4で検出した。すぐ西側ではSE266が検出されている。また



第31図 SE266・267実測図(1/40)およびSE266・267出土遺物実測図(1/4、185・186は1/6)

SE266と同じく、上部を攪乱により破壊されている。上部径1.08～1.48m、底径は0.84～1.08の楕円形で、深さ1.12mを測る。遺物は小片の土器ばかりで時期を決めにくい。

出土遺物（第32図）土器片の他、木器が検出されている。185は「Y」字状の杭とみられ、芯持ち材である。長さ45.9cm、径は4.6cmを測り、樹皮が多く残っている。また、削り痕も確認できる。186は残存長21.2cm、幅9.6cmを測る。中心に穴が開いていたとみられるが、全体的に傷んでおり、不明確である。

SE268（第33図）Ⅱ区の中心、E-4区で検出した。井戸の上部は攪乱により切られる。上部径は0.85m、底径0.67m、深さ1.12mを測る円形の井戸である。時期は弥生時代後期中頃にあたる。

出土遺物（第33図）187は壺である。口径12.6cm、底径4.0cm、高さ15.5～16.3cmである。口縁部は「く」の字状に屈曲し、外面はナデが確認できる。頸部から胴部中央は刷毛目調整である。口縁部内面は刷毛目調整が確認できる。

SE269（第34図）Ⅱ区の北側CD-4区から出土した。井戸の上部はSD228に切られる。遺構上面の径は0.78×1.12mの楕円形で、底径は0.65×0.93m、深さ0.85mを測る。地山が鳥栖ローム層から八女粘土に変わる所で底となる。遺物には土器片と共に、木製品が出土している。

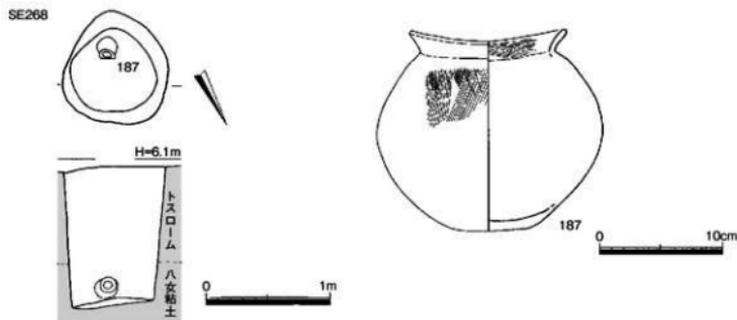
出土遺物（第34図）188は木製品の釣部である。口縁部は欠損している。径は20.0×22.7cm、残存高は10.5cmを測り、内面に削り加工痕が残る。年輪は横方向に見た時に確認でき、丸太材の半分を使用して製作したものと考えられる。

SE292（第34図）Ⅱ区の南側E-3区で検出した。上部を攪乱により破壊される。上部の径は0.98m、底径0.86m、深さ2.05mを測る円形の井戸である。時期は弥生時代後期中頃にあたる。

出土遺物（第34図）189は長頸壺である。口径3.4cm、底径8.4cm、高さ22.3cmを測る。凸レンズ状の底部を持ち、頸部に1条突帯が巡る。内外面共に刷毛目調整が確認できる。190は甕である。口径13.8cm、底径6.5cm、高さ23.6cmを測り、凸レンズ状の底部を持つ。調整は磨滅しており不明瞭であるが、工具痕が確認できる。

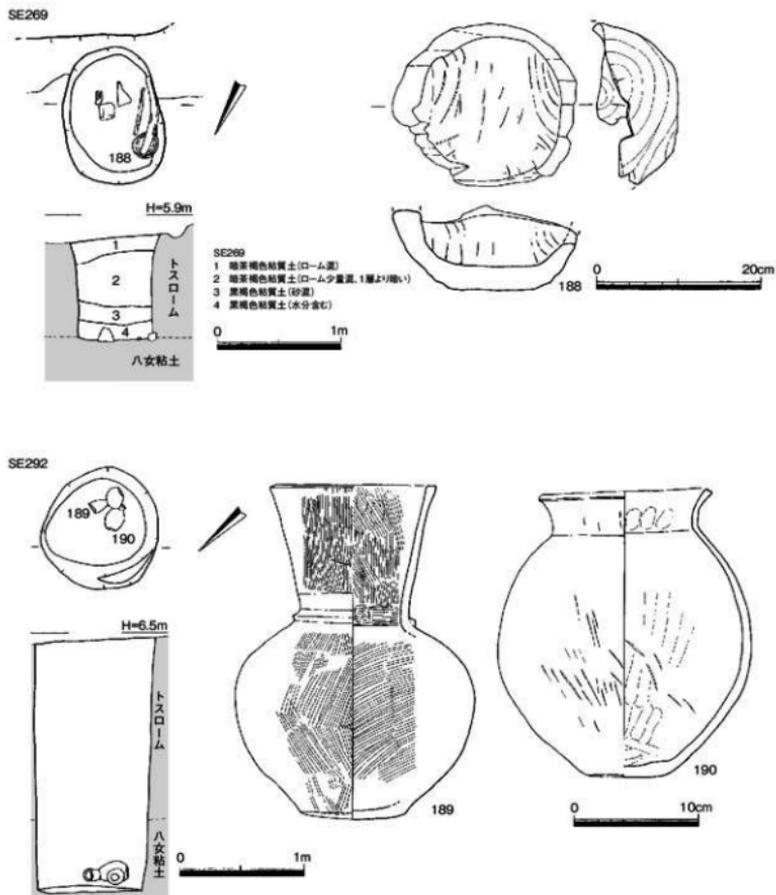
10) 土坑 (SK)

SK225（第35図）Ⅱ区の西側、E-4区で検出した。幅1.8m、深さ0.77mの土坑である。西側は調査区の外にのびており、区画の塀が近かったことから確認はしていない。土器は3層から下の層で確認されたが、量は非常に少ない。時期は弥生時代後期中頃にあたる。

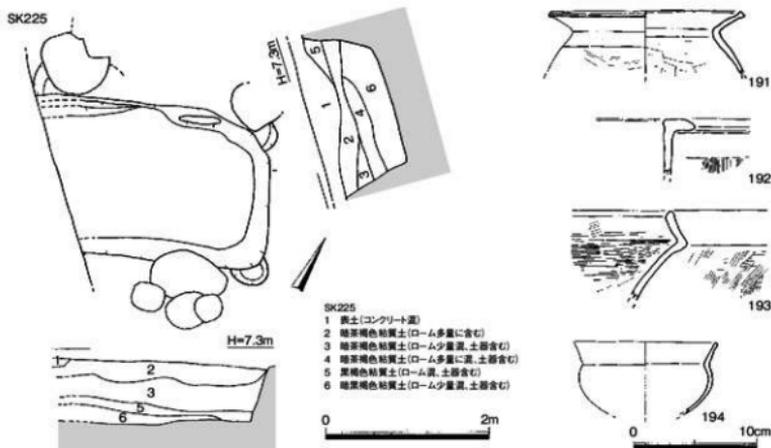


第32図 SE268実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第35図）遺物量が少なく実測できた遺物が3層出土の遺物である。193は壺である。口径約16.0cmを測る。外面はナデ、内面の口縁部から頸部まではナデ、内面胴部は削りが確認できる。194は甕の口縁部である。逆L字状の口縁部を持ち、外面には刷毛目調整が確認できる。195は二重口縁壺の口縁部付近である。内外面に刷毛目調整が確認できる。196は小型丸底壺である。口径約11.6cmを測る。



第33図 SE269・292実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/4、188は1/6）



第34図 SK225実測図 (1/6) および出土遺物実測図 (1/4)

3. 結語

I 区

I 区では掘立柱建物 3 棟、堅穴建物 4 棟、溝 2 条、井戸 4 基、土坑 1 基が出土した。

SB053は大型で長方形の柱穴を持つ掘立柱建物である。柱穴の底面は一定ではなく、段を有する。これは柱穴を掘るとき、また柱を据え付ける時などに有効に使用したのではないだろうか。また土坑として報告したが、SK080も底面に同じような段差が付く。SK080が柱穴と考えれば、SB053のP3が切る遺構が候補にはなるが、深さが浅く確証がもてない。しかし、柱穴の段である可能性は残る。SD051は土層図を見ると掘直しの跡が認められる。遺物が混ざりわからなくなってしまったが、おそらく1層と2層では時期が違うと考えられる。

SE007は古代の井戸で、井戸枠も検出された。井戸枠は井の字状に組み合わさり、底にも丸木が敷いてあった。しかし、井戸は油が染み出しており、井戸枠自体が油を吸っている状態のため、井戸枠の実測は断念した。

II 区

II 区では掘立柱建物 2 棟、堅穴建物 2 棟、溝 1 条、井戸 10 基、土坑 1 基を検出した。II 区は中央を攪乱により破壊されており、破壊された箇所では井戸など深い遺構のみの検出となった。

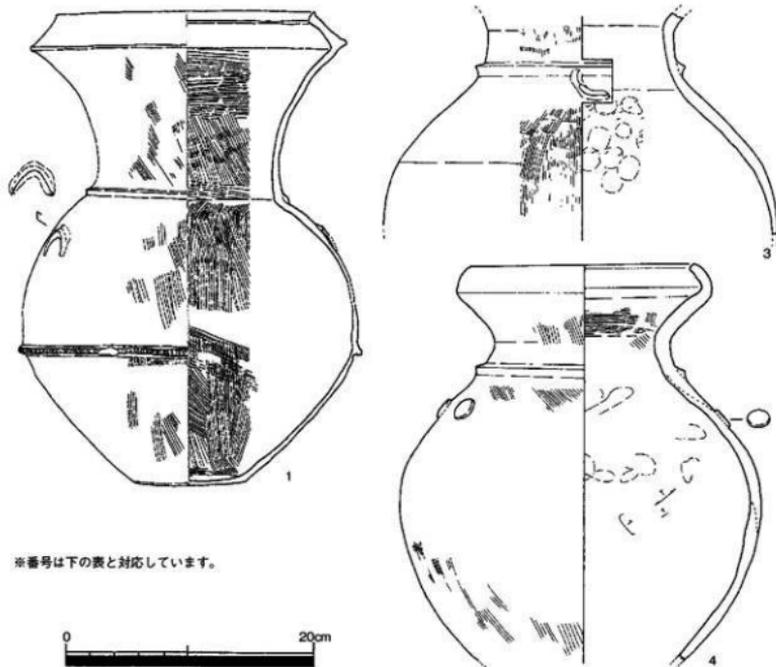
掘立柱建物は遺物が破片ばかりで不確定であるが、SB233は弥生時代後期頃、SB255は古代の土器が出土している。

SD228はSD051と違い、掘直しは確認できなかった。1層・2層は土器を確認できたが、3層ではその数は減り、破片ばかりである。4層では遺物が確認できなかった。このことから、4層が埋まる時期はまだ溝として機能しており、1層・2層の古墳時代前期には完全に埋められたと考えられる。

井戸は10基を数え時期がわかるものでは、弥生時代後期が7期、古墳時代後期から古代が1基確認できた。

浮文を有する土器について

SE265から浮文を有する土器を検出した。井戸の底付近から出土したものである。比恵・那珂遺跡群から出土した浮文を有する土器を表1にまとめた。浮文は円形、J形、U形、〇形の3種類に分けられる。祭祀に使用されたのであろうか、弥生時代中期後半から後期にかけて溝と井戸から出土した。



*番号は下の表と対応しています。

第35図 比恵遺跡群出土浮文を有する土器 (1/4)

| 遺跡名 | 遺構名 | 器種 | 時期 | 文様 | 報告書 | 挿図番号 |
|-------------|--------------------|------------|-------------|--------|-------|---------|
| 1 比恵 42 次 | SE16 | 複合口縁壺 | 弥生後期中頃～後半 | 浮文 (〇) | 368 | 47-239 |
| 2 比恵 53 次 | SD10 I 区 E 群 | 広口壺 | 弥生中期末 | 円形浮文 | 451 | 22-56 |
| 3 比恵 58 次 | SE07 (7号井戸) | 壺 | 弥生後期初～前半 | 浮文 (J) | 561 | 36-6 |
| 4 比恵 58 次 | SD01 (1号溝状遺構) | 袋状口縁壺 | 弥生中期後半～後期後半 | 円形浮文 | 561 | 43-17 |
| 5 比恵 155 次 | SE265 | 複合口縁壺 | 弥生後期中頃～後半 | 浮文 (〇) | 本報告 | |
| 6 那珂 20 次 | SD01 (東側中層上) | 甗形土器 (丹塗?) | 弥生中期末 | 浮文 (J) | 324 | 62-173 |
| 7 那珂 20 次 | SD01 (中央部中層下) | 甗形土器 | 弥生中期末～後期初 | 浮文 (J) | 324 | 65-195 |
| 8 那珂 23 次 | SD44 (I 区 Ⅱ 区 A 群) | 広口壺 | 弥生後期初 | 円形浮文 | 290 | 18-40 |
| 9 那珂 23 次 | SD44 (I 区 Ⅲ 区 A 群) | 広口壺 | 弥生後期初 | 円形浮文 | 290 | 18-42 |
| 10 那珂 23 次 | SD44 (I 区 A 群) | 広口壺 | 弥生後期初 | 円形浮文 | 290 | 21-70 |
| 11 那珂 23 次 | SD44 (II・Ⅲ 区 B 群) | 壺 | 弥生後期初 | 円形浮文 | 290 | 23-88 |
| 12 那珂 23 次 | SD44 (II・Ⅲ 区 B 群) | 甗形土器 (丹塗?) | 弥生後期初 | 浮文 (J) | 290 | 24-109 |
| 13 那珂 23 次 | SD44 (IV・V 区 C 群) | 壺 | 弥生後期初 | 浮文 (J) | 290 | 27-136 |
| 14 那珂 24 次 | SE001 | 甗形土器 (丹塗?) | 弥生後期初 | 浮文 (J) | 年報 27 | 5-00011 |
| 15 那珂 125 次 | SD009 | 甗形広口壺 | 弥生中期末～後期初 | 浮文 | 1155 | 15-2 |
| 16 那珂 125 次 | SD009 | 広口壺 | 弥生中期末～後期初 | 浮文 (U) | 1155 | 17-20 |
| 17 那珂 149 次 | SD82 中層 | 壺 | 弥生後期中頃 | 円形浮文 | 1287 | 12-28 |
| 18 那珂 149 次 | SD82 中層 | 複合口縁壺 | 弥生後期中頃 | 円形浮文 | 1287 | 14-45 |

第1表 比恵・那珂遺跡群出土浮文を有する土器一覧

図 版



比恵遺跡群第155次調査風景



(1) I区全景(上空から)



(2) II区全景(上空から)



(1) SP035 土層 (東から)



(2) SP042 土層 (東から)



(3) SP069 土層 (東から)



(4) SC004 (北から)



(5) SC004 土層 (西から)



(6) SC004 土層 (南から)



(1) SC105・106 (上空から)



(2) SC105 土層 (北東から)



(3) SC105 土層 (北西から)



(4) SD051a-a' 土層 (北東から)



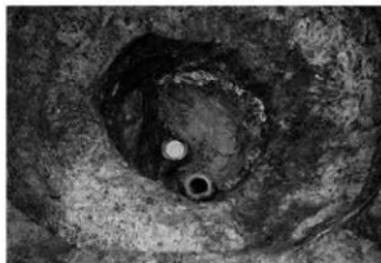
(5) SD051b-b' 土層 (北東から)



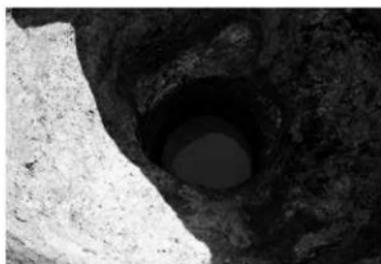
(6) SE007 (南東から)



(1) SE008 (南東から)



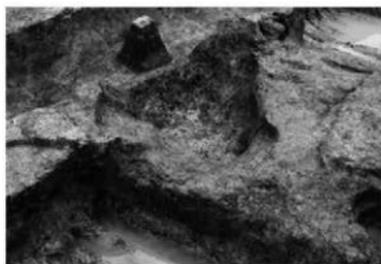
(2) SE084 (北東から)



(3) SE084 (北から)



(4) SK080 土層 (南から)



(5) SK080 (南から)



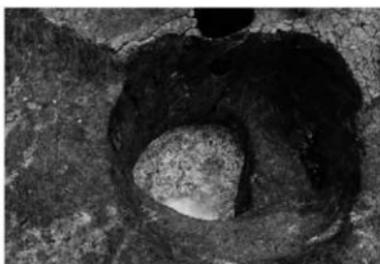
(6) SC245 (北西から)



(1) SD228a-a'土層 (西から)



(2) SE201 (南西から)



(3) SE244 (南西から)



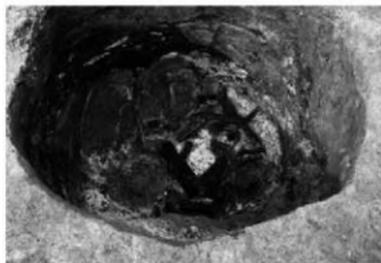
(4) SE246 (西から)



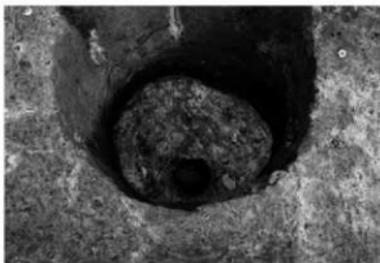
(5) SE264 (南東から)



(6) SE265 (南から)



(1) SE267 (南から)



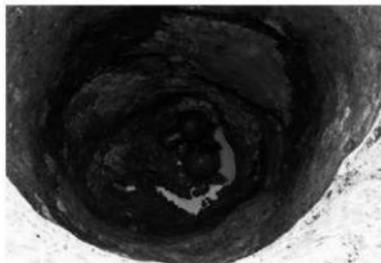
(2) SE268 (西から)



(3) SE269 (南東から)



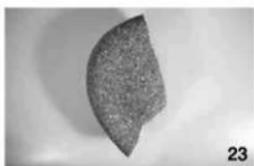
(4) SE269 (南東から)



(5) SE292 (北西から)



(6) SE225 土層 (東から)









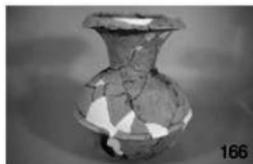
162



163



164



166



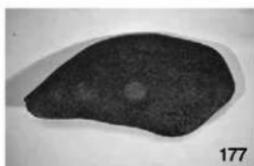
167



168



169



177



173



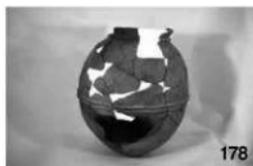
174



175



176



178



187



189



190



145

報告書抄録

| ふりがな | ひえ91 - ひえいせきぐんだい155 じちょうさほうこく- | | | | | | | |
|------------------|--|---------|------|--------------------|--------------|---------------------------|-----------|------------------|
| 書名 | 比恵91 | | | | | | | |
| 副書名 | 一比恵遺跡群第155次調査報告一 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第1489集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 清金良太 | | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL.092 - 711 - 4667 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2023年3月23日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 ㎡ | 発掘原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ひえりまきぐん 比恵遺跡群 | 福岡県福岡市 博多区博多駅南 | 40135 | 0127 | 33° 34'37" | 130° 25' 52" | 20191209 ～ 20200324 | 433.56 | 記録保存 調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 比恵遺跡群 | 集落 | 弥生時代～古代 | | 掘立柱建物、竪穴建物、溝、井戸、土坑 | | 弥生土器、土師器、須恵器、鉄器、石製品 | | 弥生時代後期から古代の集落を確認 |
| 要約 | 弥生時代後期後半～古墳時代初めの掘立柱建物跡、竪穴建物跡と共に井戸跡を複数確認した。また、東西方向に走る溝が2条確認でき、区画溝の可能性も考えられる。古代の竪穴建物跡、井戸跡が確認でき、弥生時代と古代において居住域であった事が確認できた。しかし、古墳時代中期から後期の遺構は希薄であった。 | | | | | | | |

比 恵 91

一比恵遺跡群第155次調査報告一
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1489集

令和5年3月23日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号